山口県埋蔵文化財センター調査報告　第84集

東禅寺・黒山遺跡Ⅶ

2013

公益財団法人　山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第84集

東禅寺（とうぜんじ）・黒山（くろやま）遺跡（いせき）Ⅶ

2013

公益財団法人　山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、山口市鋳銭司地内に所在する東禅寺・黒山遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。この調査は、南若川流域治水対策河川工事に伴い、山口県防府土木建築事務所から委託を受けて、公益財団法人山口県ひとづくり財団が実施しました。

調査の結果、平安時代から室町時代にかけての集落跡が確認され、隣接する周防鋳銭司との関連や鋳銭司地区における人々のあゆみを知るうえで、重要な成果を収めることができました。

本書が文化財保護に対する理解を深め、教育ならびに学術研究や郷土史理解の資料として広く活用されることを期待するものであります。

最後になりましたが、当発掘調査の実施・報告書の作成にあたり、ご指導・ご協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成25年３月

公益財団法人　山口県ひとづくり財団
理事長　松　永　貞　昭

例　言

1　本書は平成24年度に実施した、東禅寺・黒山遺跡（山口県山口市鋳銭司地内）の発掘調査報告書である。

2　調査は公益財団法人山口県ひとづくり財団が山口県防府土木建築事務所の委託を受けて実施した。（契約名：南若川　単独河川改修工事に伴う調査業務委託　第１工区）

3　調査組織は次のとおりである。

調査主体　公益財団法人山口県ひとづくり財団　山口県埋蔵文化財センター

調査担当　主任調査研究員　小　南　裕　一
文化財専門員　高　木　英　明
文化財専門員　水　津　亜希子
調　査　員　大　重　優　花

4　調査にあたっては、山口県教育委員会、山口市教育委員会、山口県防府土木建築事務所ならびに地元関係各位から協力・援助を得た。

5　本書の図１は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図「小郡」「台道」を複製使用した。図２は山口県防府土木建築事務所提供の地図を元に作成した。

6　本書で使用した方位は、国土座標（世界測地系）の北で示し、掘立柱建物跡以外の個別遺構に関しては磁北で示している。また、標高は海抜高度（m）である。

7　本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。

8　図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。

9　本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物　ＳＡ：欄列　ＳＤ：溝状遺構　ＳＫ：土坑
ＳＴ：墓　ＳＥ：井戸　ＳＰ：柱穴　ＳＸ：性格不明遺構

10　出土遺物実測図について、断面黒塗は須恵器を表す。また、濃い網掛けは黒色土器、薄い網掛けは緑釉陶器を表す。

11　出土銭の成分分析については、財団法人元興寺文化財研究所に依頼し、その成果を付編として掲載した。

12　報告書作成の過程で、磁器の鑑定については上田秀夫氏（山口県立萩美術館・浦上記念館）・徳留大輔氏（同）、出土銭の鑑定については櫻木晋一氏（下関市立大学）、墨書土器の判読については吉積久年氏（山口県文書館）にご教示・ご協力を賜った。

13　本書の作成・執筆は、小南・高木・水津・大重が共同で行い、編集は小南が行った。

本文目次

Ⅰ　遺跡の位置と環境…… 1
Ⅱ　調査の経緯と概要…… 3
Ⅲ　調査の成果…… 5
　1　遺構 …… 5
　2　遺物 ……33
Ⅳ　まとめ……51
付編　東禅寺・黒山遺跡出土金属製品の分析……53

挿図目次

図1　遺跡の位置と周辺の遺跡…… 1
図2　調査区設定図…… 3
図3　XW地区遺構配置図…… 7･8
図4　XW地区検出遺構（1）…… 9
図5　XW地区検出遺構（2）……10
図6　XW地区検出遺構（3）……11
図7　XW地区検出遺構（4）……12
図8　XW地区検出遺構（5）……13
図9　XW地区検出遺構（6）……15
図10　XW地区検出遺構（7）……16
図11　XW地区検出遺構（8）……17
図12　XW地区検出遺構（9）……18
図13　XV地区遺構配置図…… 19･20
図14　XV地区検出遺構（1）……22
図15　XV地区検出遺構（2）……23
図16　XV地区検出遺構（3）……24
図17　XV地区検出遺構（4）……25
図18　XV地区検出遺構（5）……26
図19　XV地区検出遺構（6）……27
図20　XU地区遺構配置図……29
図21　XU地区検出遺構（1）……30
図22　XU地区検出遺構（2）……31
図23　XW地区出土遺物（1）……34
図24　XW地区出土遺物（2）……35
図25　XW地区出土遺物（3）……36
図26　XW地区出土遺物（4）……37
図27　XW地区出土遺物（5）……38
図28　XV地区出土遺物（1）……40
図29　XV地区出土遺物（2）……41
図30　XV地区出土遺物（3）……42
図31　XV地区出土遺物（4）……43
図32　XU地区出土遺物（1）……45
図33　XU地区出土遺物（2）……46

表目次

表1　掘立柱建物跡一覧表……32
表2　出土土器・土製品観察表……47

図版目次

図版１　調査区遠景
図版２　調査区全景
図版３　Ⅹ地区全景
図版４　Ⅺ地区全景
図版５　Ⅻ地区全景
　　Ⅹ地区北東部掘立柱建物群
図版６　Ⅹ地区南西部掘立柱建物群
図版７　ＳＢ６ 完掘状況
　　ＳＢ25完掘状況
　　ＳＢ27完掘状況
　　ＳＢ37完掘状況
　　Ⅻ地区西半部掘立柱建物群
図版８　ＳＰ109遺物出土状況
　　ＳＰ397遺物出土状況
　　ＳＰ428礫出土状況
　　ＳＰ470遺物出土状況
　　ＳＰ574遺物出土状況
　　ＳＰ613遺物出土状況
　　ＳＰ729遺物出土状況
　　ＳＰ797遺物出土状況
図版９　ＳＫ２土層断面
　　ＳＫ７遺物出土状況
図版10　ＳＫ10上部遺物出土状況
　　ＳＫ17遺物出土状況
　　ＳＫ21礫出土状況
　　ＳＫ22土層断面
　　ＳＴ１遺物出土状況①
　　ＳＴ１遺物出土状況②
　　ＳＴ１遺物出土状況③
図版11　ＳＥ１土層断面
　　ＳＥ２石組み検出状況
　　ＳＥ３土層断面
　　ＳＥ３完掘状況
　　ＳＥ４完掘状況
　　ＳＥ５土層断面
　　ＳＥ５完掘状況
　　ＳＥ６土層断面
図版12　ＳＸ１土層断面
　　ＳＸ５遺物出土状況
図版13　ＳＸ６土層断面
　　ＳＸ６遺物出土状況①
図版14　ＳＸ６遺物出土状況②
　　ＳＸ６遺物出土状況③
　　ＳＸ６完掘状況
　　ＳＸ７遺物出土状況①
　　ＳＸ７遺物出土状況②
図版15　ＳＸ10遺物出土状況①
　　ＳＸ10遺物出土状況②
図版16　ＳＸ10遺物出土状況③
　　ＳＸ10土層断面
　　ＳＸ10完掘状況
図版17　出土遺物（１）
図版18　出土遺物（２）
図版19　出土遺物（３）
図版20　出土遺物（４）
図版21　出土遺物（５）
図版22　出土遺物（６）
図版23　出土遺物（７）
図版24　出土遺物（８）
図版25　出土遺物（９）
図版26　出土遺物（10）
図版27　出土遺物（11）
図版28　出土遺物（12）
図版29　出土遺物（13）
図版30　出土遺物（14）

Ⅰ　遺跡の位置と環境

東禅寺・黒山遺跡は、山口市鋳銭司地区に所在する古代から中世にかけての集落跡である。鋳銭司地区は、山口市の中心部から南へ約11㎞、吉南平野の北東部に位置する。三方を山に囲まれ、北から東は標高300～400ｍの山口山地、南は標高200～300ｍの秋穂山地が連なっている。本遺跡は山口山地の黒河内山山麓に形成された段丘面上に位置しており、付近一帯の地質は砂・礫・粘土からなっている。鋳銭司地区の標高は７～12ｍであり、古代・中世における海岸線が標高６～７ｍであったと推定されること、同地区の南西部には近世以降にできた干拓地が広がっていること、海岸近くに生育する植物遺体が過去の調査で出土していることなどから、本遺跡から近い位置に海岸線があったと考えられる。

気候は瀬戸内式で、年間を通じて温暖少雨であり、潅漑用の人工池が多くみられるのが、この地域の特色でもある。その中で最大のものは、本遺跡の東側にある慶安４(1651)年築堤の長沢池であり、周囲は4.2㎞に及ぶ。また、本遺跡の西側には金毛川が流れ、南若川に合流している。この川は大雨の度に氾濫し、周辺地域一帯に被害を及ぼしてきた。

本遺跡の歴史的環境を考察する際、山陽道(山陽大路)と２つの国指定史跡、陶窯跡と周防鋳銭司跡について記す必要があろう。

古代の官道の中で最重要路線であった山陽道は、本遺跡の南側にある現在の国道２号線あたりを

1．**東禅寺・黒山遺跡**　2．東禅寺・黒山遺跡（岡上ノ原・後子廻地区）　3．東禅寺・黒山遺跡（東大円・上懸田地区）
4．東禅寺・黒山遺跡（河原地区）　5．周防鋳銭司跡　6．上北田遺跡　7．八ケ坪遺跡　8．糸根遺跡
9．下糸根遺跡　10．友輪窯跡　11．鋳銭坊遺跡　12．潟上遺跡　13．稲富窯跡　14．舟木遺跡　15．伊表山遺跡
16．桐ヶ浴・尾口山遺跡　17．和西遺跡　18．壺（壱）窯遺跡　19．弥市原遺跡　20．天神原遺跡　21．河原遺跡
22．長沢池遺跡　23．道ノ上遺跡　24．裁河内遺跡　25．今宿東遺跡　26．今宿西遺跡　27．鋳銭司大歳遺跡　28.上辻遺跡

図１　遺跡の位置と周辺の遺跡

通っていたと考えられている。当時の鋳銭司地区は八千郷と呼ばれ、山陽道の宿駅として栄えた交通の要衝であった。また、中世には、大内氏の城下町山口とその外港秋穂浦を結ぶ秋穂街道が、本遺跡の南側、四辻で山陽道と交差していた。それ故、四辻周辺は、大変なにぎわいをみせていたといわれている。

陶窯跡は、奈良時代から平安時代にかけての須恵器の窯跡である。鋳銭司地区に西隣する陶地区向田につくられたもので、丘陵の南斜面(標高約80m)に半地下式の構造がほぼ完全に残っている。50基以上の窯跡が存在すると考えられており、生産された須恵器は周防鋳銭司などに供給されていたとみられる。この地で窯業が発展した要因として、良質な陶土の産出地で燃料となる森林資源も豊富であったこと、水陸の交通の便に恵まれ窯業に適した南向きの斜面が得やすい地形であったことなどが挙げられる。

金毛川を挟んで本遺跡の対岸にある周防鋳銭司跡は、天長2年(825)に開設された平安時代の官営鋳銭所の遺跡である。律令制の崩壊に伴って終焉を迎える11世紀初頭までの約200年間にわたって存続した。9世紀中頃以降は、わが国唯一の官営の鋳銭司として皇朝十二銭のうち8種を鋳造しており、「鋳銭坊(いさんぼう)」、「銭庫(せんこ)」など鋳銭関係の地名が現在も残っている。都から遠隔の地であったにもかかわらず、周防鋳銭司がこの場所に設置されたのは、中央政府の直轄であった周防国府の外縁地域にあり、水陸の交通の便、鋳銭の過程で使用する粘土や薪炭及び原料となる銅鉱の入手等、鋳銭に必要な基盤が整っていたからにほかならない。

本遺跡における人間活動の痕跡は、現在までのところ、縄文時代までさかのぼることができる。平成22年度の調査で玦状耳飾が出土しており、縄文時代の前半期から人々の活動の場であったことがわかっている。いっぽう、弥生時代から奈良時代にかけての活動痕跡は極めて少なく、平成22年度の調査で発見された古墳時代の土師器甕1点のみである。

平安時代以降の遺物や遺構の検出数は大変多く、人々の生活痕跡が色濃く残っている。また、周防鋳銭司の開設後に集落が形成され、銅銭、羽口、緑釉陶器、坩堝、銅滓などが出土していることから、鋳銭司にかかわりのある人々が生活していたと考えられる。いっぽう、土錘も多数出土しており、漁業活動も生活の一部として行われていたとみられる。鎌倉・室町時代になると、集落は西側から東側へ、低地から高地へと移動したことが明らかになっている。その後、治水事業の進展による耕地拡大に伴い、遺跡一帯は現在のような水田地帯になったと考えられる。

参考文献
山口県埋蔵文化財センター
『東禅寺・黒山遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ』1996、1997、1998、1999、2000、2011
山口県埋蔵文化財センター 2003『東禅寺・黒山遺跡(東大円・上徳田地区)』
山口県埋蔵文化財センター 2009『東禅寺・黒山遺跡(岡上ノ原・後子庵地区)』
山口市教育委員会 2000『東禅寺・黒山遺跡』
山口市 2012『山口市史　史料編考古・古代』
山口市史編集委員会 1982『山口市史』山口市
山口市教育委員会 2000『山口市内遺跡詳細分布調査　鋳銭司地区』
山口市教育委員会 1999『山口市内遺跡詳細分布調査　陶地区』
山口県教育委員会文化課編 1982『弥市原・東禅寺』
山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター編 1984『上辻・鋳銭司大歳・今宿西』
山口市教育委員会 1978『周防鋳銭司跡』
山口市教育委員会 2007『陶窯跡群Ⅱ』

Ⅱ　調査の経緯と概要

東禅寺・黒山遺跡が位置する山口市鋳銭司地区は、北から金毛川、東から高橋川が流れてきて南若川に合流する地点にあり、標高が7～12mと低いため、度々大雨による水害に見舞われてきた。そこで山口県は、この地域に調整池を建設する工事を計画し、これに伴って平成7年度から平成11年度までの5年間、当該地区の埋蔵文化財発掘調査が実施されてきた。その後、諸般の事情により、工事計画の実施が延びたため、調査も一次中断していたが、平成22年度には調査が再開され、その成果は『東禅寺・黒山遺跡Ⅵ』（山口県埋蔵文化財センター調査報告第77集）として刊行されている。

こうした状況下、平成23年度に山口県防府土木建築事務所と山口県教育委員会が協議し、南若川流域治水対策河川工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査（東禅寺・黒山遺跡）を実施することとなり、山口県防府土木建築事務所からの委託を受けた公益財団法人山口県ひとづくり財団・山口県埋蔵文化財センターが平成24年度に調査を行うこととなった。

平成24年4月2日付けで調査の委託契約が締結され、以後、発掘調査のための事前準備を進めていった。山口県防府土木建築事務所との打ち合わせを行うとともに、近隣の小・中学校、警察署、地元自治会等に調査期間中における安全確保のための理解と協力を要請した。その後、5月10日に作業員説明会を実施し、作業内容の確認や安全管理等について周知徹底を図った。

本年度の調査対象面積は3,490㎡であり、3箇所に分散する対象地をⅣ～Ⅻ地区とそれぞれ命名し（図2）、調査を開始した。5月25日から作業員を投入して遺構面確認のためのトレンチ掘削を行い、5

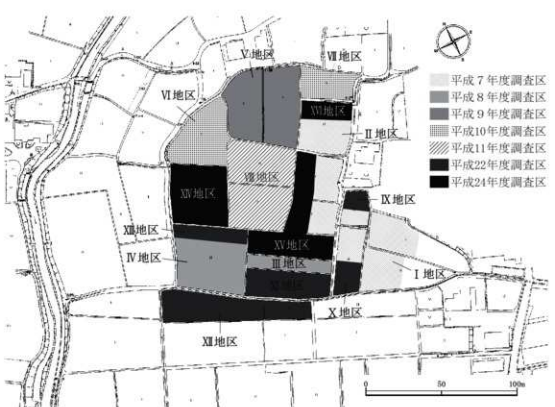


図2　調査区設定図

月28日にはⅫ地区から順次表土除去作業を開始した。続いて人力による遺構検出作業に入ったが、梅雨時に重なったため、雨が降ると雨水の逃げ場がない調査区は冠水し、度々作業は中断した。そこで、特に水はけの悪いⅪ・Ⅻ地区については、周囲に排水用の溝を掘り、常時ポンプを稼働させることで何とか全地区の検出作業を終え、７月26日から遺構の掘り込みを開始した。調査の進展に従って、随時調査員が各遺構の実測図作成および記録写真撮影等を行い、Ⅻ地区では多数の掘立柱建物跡や土坑が次々に確認され、掘り込みが進められていったが、その過程で７月27日には山口市文化財教室の小学生38名を受け入れ、遺跡見学ならびに発掘体験を実施した。また、８月６日には山口県内の教員を対象として当センターが開催した「まいぶんスクール―授業に活かせる埋蔵文化財講座―」に伴い、参加教員が本遺跡にて発掘体験作業を行った。ほとんどの教員が発掘作業は初めての体験であったが、厳しい暑さの中で懸命に作業に取り組んでいた。

表土除去

７月下旬から８月にかけて連日猛暑が続いたが、９月以降は天候に恵まれ、調査は順調に進んだ。そして、Ⅹ・Ⅺ地区の掘り込みを終え、Ⅻ地区の掘り込みに入った時点の11月23日に調査成果を公開する場として現地説明会を実施したところ、地元住民を中心として約60名の参加があり、盛会のうちに終了することができた。その後、Ⅻ地区の遺構掘り込みと図面作成を終え、11月30日には空中写真撮影および測量作業を行った。

調査風景

12月14日には、最終確認のためのトレンチ掘削、作業員による簡易の埋め戻し、調査員による図面の補足作業等を全て終え、12月17日に調査事務所の撤去等を行い、６ヶ月半におよぶ現地調査を無事終了することができた。

現地説明会

現地撤収後は、山口県埋蔵文化財センターにおいて、かねてから進めていた記録類の整理に本格的に着手し、新たに出土遺物の実測図作成および写真撮影を行った。合わせて挿図・写真図版の作成、原稿執筆等の作業を続け、この報告書を刊行するに至った。

Ⅲ　調査の成果

1　遺構

今回の発掘調査では、古代・中世の掘立柱建物、土坑、墓、井戸、溝状遺構、性格不明遺構などを検出した。ここではⅣ～Ⅻ各地区の主な遺構を取り上げ、解説を行いたい。

(1) Ⅻ地区検出遺構

Ⅻ地区では掘立柱建物17棟を復元したほか、井戸４基、土坑14基、墓１基、性格不明遺構７基、溝状遺構９条を検出した(**図３**)。掘立柱建物は、いくつかの集中区があり、調査区の北東部にSB１～４、南西部にSB７～11･17が重複して検出されている。これら掘立柱建物の時期には若干の幅があるが、他の調査区と比較すると、古代後半期のものが多いようである。また、南西部集中箇所のSB７とSB10は大型の建物で、出土遺物からも官衙的な建物として評価できる。

溝状遺構は、人為的に構築されたものであるが、いずれも浅く、建物等の区画というよりも、排水や水田区画の施設として構築されたものと考えられる。また遺物も古代のものと中世のものが混在した状態で出土するものが多く、明確な時期比定が困難であるが、掘立柱建物との重複関係や、中世の井戸であるSE２とSD１との密接な関連を考慮すると、その大部分が中世以降の所産と判断できる。

①掘立柱建物跡

ＳＢ１(図４　図版５)Ⅻ地区北東部の遺構密集区に位置する総柱の建物跡で、桁行３間(7.0m)×梁行３間(5.4m)、床面積37.80㎡を測る。棟方向はＮ72°Ｗで、隣接するSB２・SB３・SB４とほぼ同一である。出土遺物から古代後期の建物であると考えられる。

ＳＢ３(図４　図版５)Ⅻ地区北東部の遺構密集区に位置する建物跡で、桁行３間(6.4m)×梁行２間(2.7m)、床面積17.28㎡を測る。棟方向はＮ73°Ｗで、平面形は長方形を呈する。出土遺物から古代の建物である可能性が高い。

ＳＢ６(図６　図版７)Ⅻ地区北端に位置する建物跡で、桁行２間(6.0m)×梁行２間(4.1m)、床面積24.60㎡を測る。SB５と隣接し、棟方向はＮ16°Ｅ。建物の棟方向や規模が後述するSB13と類似するため、中世の建物であると判断している。

ＳＢ７(図５　図版６)Ⅻ地区南西部の遺構密集区に位置する建物跡で、桁行６間(15.0m)×梁行２間(4.6m)、床面積69.00㎡を測り、今回の調査で検出された37棟の中では最大規模である。棟方向はＮ79°Ｗ。出土遺物には土師器椀などのほかに土師質の香炉があり、一般的な掘立柱建物とは異なる特徴を示している。ところで本建物と重複するSB10は二面廂をもつ大型建物であるが、その北側身舎を構成する柱穴のうち６つが、SB7の南側廂として拾える可能性がある。しかし、これら柱穴には切り合い・柱抜取による平面形状や土層の大きな乱れは認められない。よって、とりあえずSB７自体は廂をもたない掘立柱建物として報告するが、建替時における(SB７とSB10の先後関係は明らかではない)柱の再利用があれば、これら両建物に共有される柱穴として、SB７の廂部分とすることができる。よって本図には、一面廂付き建物としての復元図も併せて掲載している。

ＳＢ９（図６　図版６）Ⅻ地区南西部の遺構密集区に位置する建物跡で、桁行４間（9.6m）×梁行２間（4.4m）、床面積42.24㎡を測る。棟方向はＮ75°Ｗで、隣接するSB8・SB10とほぼ同じである。こうした棟方向や出土遺物から古代の建物と考えられる。

ＳＢ10（図７　図版６）Ⅻ地区南西部の遺構密集区に位置する建物跡で、桁行５間（12.5m）×梁行２間（4.6m）、床面積57.50㎡を測る。棟方向はＮ76°Ｗで、南面に1.2m、北面に1.1mの廂をそれぞれ有する。二面廂の大型建物であり、個々の柱穴も大きく、床束構造の建物であった可能性が高い。出土遺物から古代後半期に比定でき、官衙的な性格が推測される。

ＳＢ13（図８　図版６）Ⅻ地区中央部の西側に位置する建物跡で、桁行２間（5.2m）×梁行２間（4.0m）、床面積20.80㎡を測る。棟方向はＮ18°Ｅで、隣接するSB15・SB16・SB17とほぼ同じである。各柱穴から土師器や瓦質土器が出土しており、これらの遺物から中世の建物と考えられる。

ＳＢ17（図８　図版６）Ⅻ地区中央部に位置する建物跡で、桁行３間（7.0m）×梁行１間（3.8m）、床面積26.60㎡を測る。棟方向はＮ18°Ｅで、東面に0.8mの廂を持つ。建物東側の柱穴は、すべてSD３の底面で確認されたものであり、このことからSB17→SD３という先後関係を知ることができる。出土遺物から古代の所産であると考えられる。

②土坑

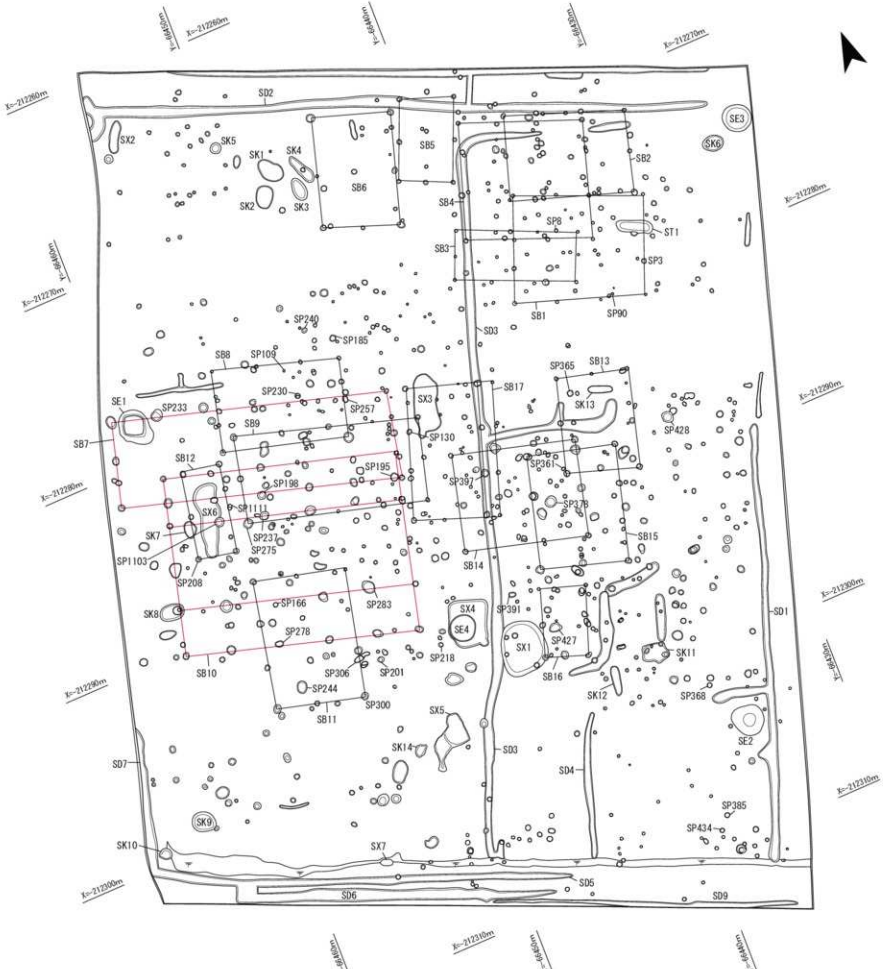
ＳＫ２（図９　図版９）Ⅻ地区南端に位置し、SK１・SK３・SK４に隣接する。平面形は、長軸119㎝、短軸は91㎝の不整円形を呈し、深さは、最深部で16㎝を測る。埋土は４層に分けられ、床面直上に堆積する第３層には炭が多く含まれている。

ＳＫ７（図９　図版９）Ⅻ地区南西部の遺構密集区に位置し、SX６の西側に隣接する。平面形は、長軸92㎝、短軸65㎝の楕円形を呈する。深さは最深部で24㎝を測る。埋土は単層で、土層上位に土師器杯や黒色土器などが石とともに廃棄されていた。

ＳＫ10（図９　図版10）Ⅻ地区の南西端に位置する。平面形は、長軸69㎝、短軸58㎝の不整円形を呈する。深さは32㎝を測り、断面は逆台形を呈する。この遺構は包含層除去後に平面プランを把握できたものであり、その上面で遺物がまとまって出土している。これらの遺物は当初包含層出土遺物として扱っていたが、周辺の掘り下げによって、本遺構に伴うものであった可能性が高くなった。出土した遺物から判断して当遺構は中世後半期のものと考えられる。

③墓

ＳＴ１（図９　図版10）Ⅻ地区北東部の遺構密集区に位置する。墓坑は、長さ195㎝、最大幅49㎝の長円形を呈し、主軸方位はＮ59°Ｗである。土層は単層で、黄色系と黒色系の粘質土が混在した状態の埋土であり、セクションの確認所見では、木棺等の痕跡は確認できなかった。長軸東側には土師器皿・杯が配置されており、そこから35㎝ほど西の部分から棒状の金銅製品や延喜通寶が検出された。こうした状況から、南東方向に頭位を置く平安時代後期の成人墓であると判断できる。



0 (1/200) 10m

図3　迎地区遺構配置図

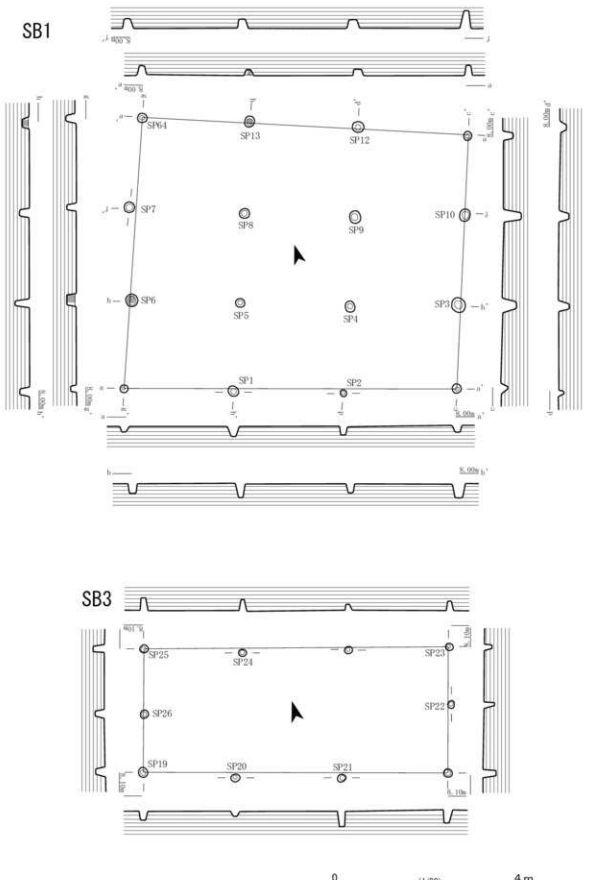

SB1
SP64
SP13
SP12
SP7
SP8
SP9
SP10
SP6
SP5
SP4
SP3
SP1
SP2
SB3
SP25
SP24
SP23
SP26
SP22
SP19
SP20
SP21
0
(1/80)
4m

図4　邛地区検出遺構（1）

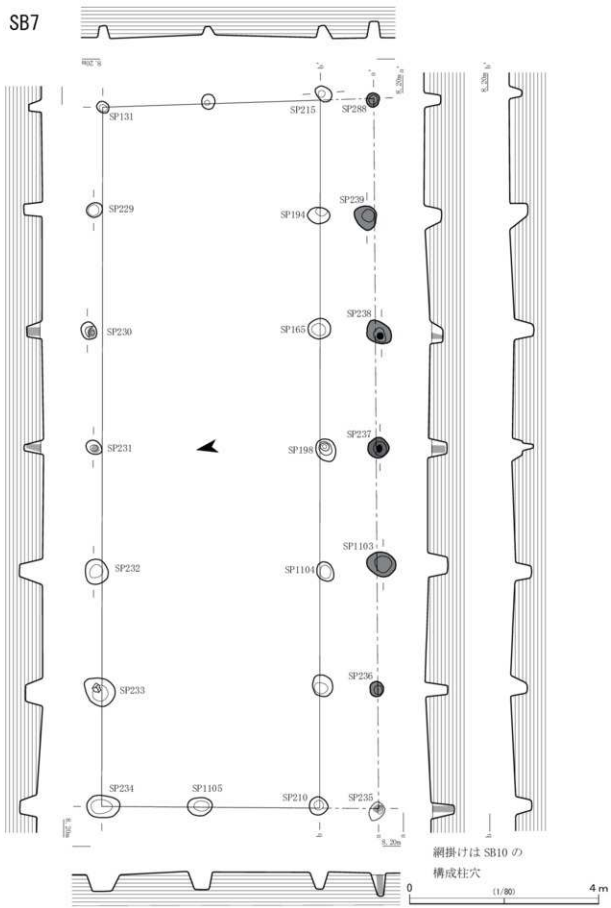

SB7
SP131
SP215
SP288
SP229
SP194
SP239
SP230
SP165
SP238
SP231
SP198
SP237
SP232
SP1104
SP1103
SP233
SP236
SP234
SP1105
SP210
SP235
8.20m
網掛けは SB10 の
構成柱穴
0
(1/80)
4m

図5　邛地区検出遺構（2）

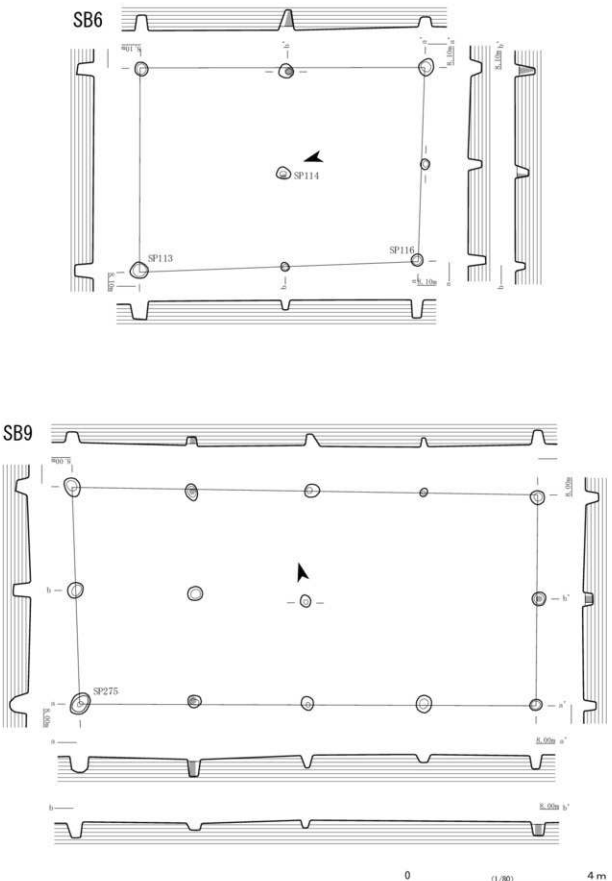


図6　邛地区検出遺構（3）

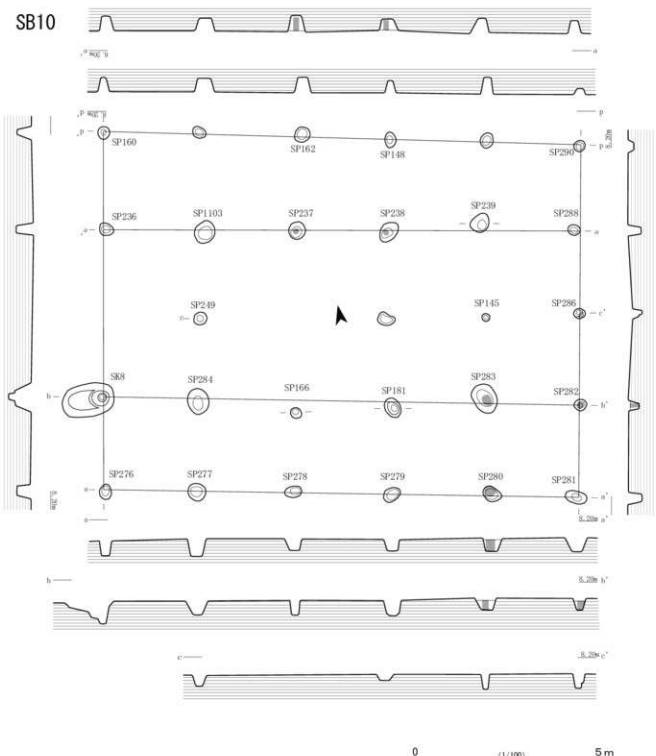

SB10
SP160
SP162
SP148
SP290
SP236
SP1103
SP237
SP238
SP239
SP288
SP249
SP145
SP286
SK8
SP284
SP166
SP181
SP283
SP282
SP276
SP277
SP278
SP279
SP280
SP281
0
(1/100)
5m

図7　邛地区検出遺構（4）

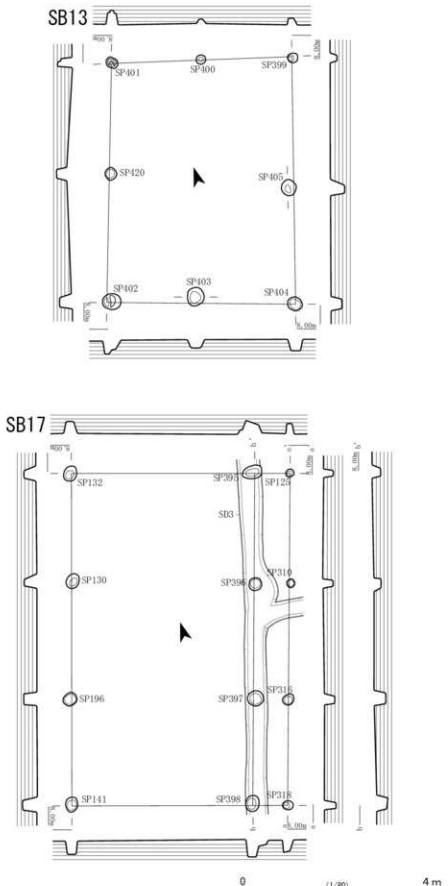

SB13
SP401
SP400
SP399
SP420
SP405
SP402
SP403
SP404
SB17
SP132
SP393
SP125
SD3
SP130
SP394
SP310
SP196
SP397
SP315
SP141
SP398
SP318
0
(1/80)
4m

図8　邛地区検出遺構（5）

④井戸

ＳＥ１（図10　図版11）ⅩⅣ地区の西端に位置する素掘りの井戸である。平面形は、長軸213cm、短軸171cmの楕円形を呈する。はげしい湧水のため完掘していない。土層は３層に分層され、木枠の痕跡などは認められない。出土遺物として土師器皿、白色系の土師器椀、瓦片などがあり、古代末から中世初頭の所産であると考えられる。

ＳＥ２（図10　図版11）ⅩⅣ地区の南東端に位置する井戸で、SD１の一部に囲まれるように配置されている。平面形は、長軸186cm、短軸160cmの楕円形を呈し、深さは90cmで、比較的浅い井戸である。長軸方向西側に礫が集中的に認められるが、これらは本来、井戸枠の周辺にめぐらされていた可能性がある。井戸の廃絶時に木枠の抜き取りと同時に除去・廃棄されたものであろう。出土遺物から中世末期には廃絶した井戸であると考えられる。

ＳＥ３（図10　図版11）ⅩⅣ地区の北東端に位置する素掘りの井戸である。平面形は、長軸169cm、短軸150cmの楕円形を呈する。深さは105cmを測る。土層は８層に分けられるが、木枠やその痕跡は確認できていない。出土遺物から中世の所産と考えられる。

ＳＥ４（図版11）ⅩⅣ地区中央部の南側に位置する素掘りの井戸である。平面形は、長軸160cm、短軸153cmのほぼ円形を呈する。深さは143cmを測る。SX４と重複関係にあり、SE４→SX４という先後関係である。出土遺物は少ないが、中世の所産と考えられる。

⑤性格不明遺構

ＳＸ１（図11　図版12）ⅩⅣ地区中央部の南側に位置し、SD３と重複関係にある。平面形は、長軸311cm、短軸242cmの不整円形を呈し、深さは35cmを測る。埋土は４層に分層でき、いずれも粘質土系の土である。遺物はほとんど出土しておらず、詳細な年代は不明。SD３をはさんで西側に位置するSX４とは平面形態や規模で類似しており、両者は同一の機能をもつ遺構と考えられる。

ＳＸ５（図12　図版12）ⅩⅣ地区中央部の南側に位置する。平面形は、長軸317cm、短軸129cmの不整円形を呈する。底面は凹凸があり、深さは14cmを測る。遺構の西半側からは足鍋片が出土しており、東半は一段低くなっている。

ＳＸ６（図11　図版13･14）ⅩⅣ地区南西部の遺構密集区に位置し、SK７に隣接する。平面形は、長軸404cm、短軸111cmの不整長円形を呈する。底面は凹凸があり、深さは23cmを測る。長楕円形に近い形状をもつ本遺構は、当初、土器焼成窯の可能性も視野に入れ、調査を進めたが、壁周辺や底面に被熱痕跡がないことや、出土遺物の状態などから、単なる廃棄土坑と判断した。なお、当遺構はSB７・10の柱穴を切っており、こうした大型遺構の廃絶後に構築されたものと考えられる。

ＳＸ７（図12　図版14）ⅩⅣ地区の南端に位置するが、後世の水田造成時に削平されているため、本来の平面形は明らかではない。ただし、土師器皿と杯がまとまって出土しており、こうした状況はこの遺構が墓であった可能性を示すもので、土師器類が置かれている側を頭位とすれば、その方向は北東ということになる。出土遺物から中世後半期に比定される。

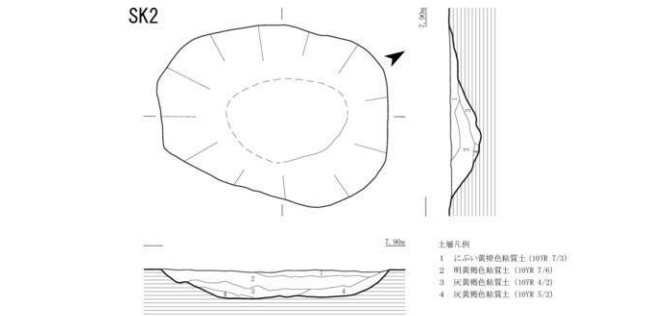

SK2
7.90m
土層凡例
1 にぶい黄橙色粘質土 (10YR 7/3)
2 明黄褐色粘質土 (10YR 7/6)
3 灰黄褐色粘質土 (10YR 4/2)
4 灰黄褐色粘質土 (10YR 5/2)
SK7
7.80m
7.90m
SK10
7.60m
7.60m
ST1
7.90m
7.90m
銅製品
0 (1/20) 50cm

図9　邛地区検出遺構 (6)

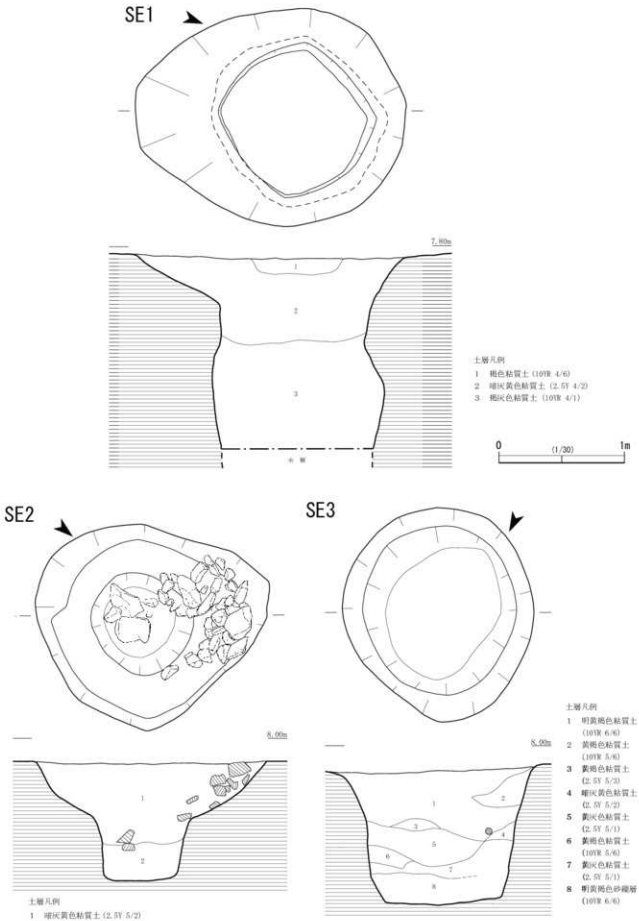


図10　邓地区検出遺構（7）

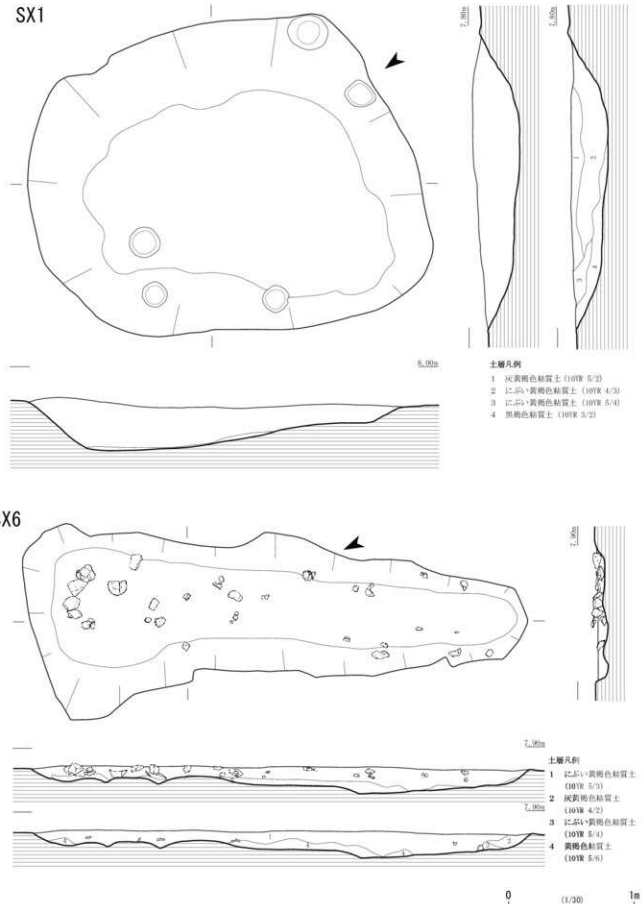


図11　邛地区検出遺構（8）

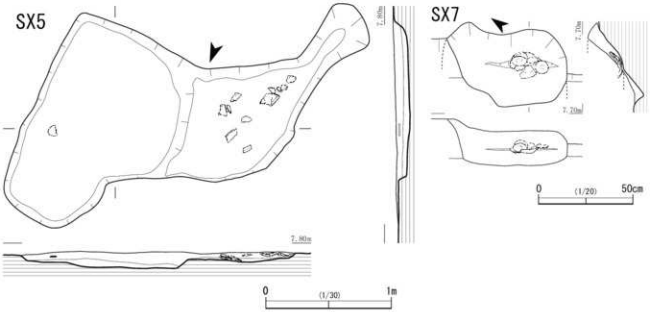


図12　XV地区検出遺構（9）

(2) XV地区遺構

掘立柱建物15棟を復元したほか、土坑10基、井戸１基、性格不明遺構４基、溝状遺構13条を検出した(**図13**)。掘立柱建物は、SB22のように建物の長軸方向が東西を意識するものと、SB25のように南北を意識するものの２タイプがあるが、出土遺物などから判断すると、若干の時期差はあるものの、両者とも中世の所産であると推定される。またSB30･32のような小型の建物の存在も注目される。

溝状遺構は13条確認したが、このうちSD15･16･21と命名したものは近代以降の暗渠であり、検出された各遺構とは時期が異なる。そのほかのものは中世の所産と考えられ、SD12は井戸であるSE５を取り囲むように掘削されており、両者は同時期に機能していたものと考えられる。

このように本地区は、主に中世の集落空間であったと評価できるが、性格不明遺構であるSX10からは平安時代後期の土師器、須恵器などとともに、鋳造関連遺物である羽口や炉壁が一括して投棄されている。当該時期においては、鋳造用品や生活道具を廃棄するスペースとして利用されていたものと考えられる。

①掘立柱建物跡

ＳＢ21(図14)XV地区南半部東側の遺構密集区に位置する建物跡で、桁行３間(6.8m)×梁行２間(4.2m)、床面積28.56㎡を測る。棟方向はＮ70°Ｗで、この遺構密集区で復元されたSB19～SB24の６棟は、棟方向がほぼ同じである。

ＳＢ22(図15)XV地区南半部東側の遺構密集区に位置する建物跡で、桁行３間(9.8m)×梁行２間(6.8m)、床面積66.64㎡を測り、XV地区の中では最大規模の建物跡である。棟方向はＮ68°Ｗで、北面に1.3mの廂を有し、床束建物と推定される。中世後半期の掘立柱建物である。

ＳＢ25(図14　図版７)XV地区北半部の南側に位置する建物跡で、桁行３間(6.7m)×梁行２間(4.4m)、床面積29.48㎡を測る。棟方向はＮ20°Ｅで、南隅柱穴は今回の調査区外に位置する。各柱穴の掘方は

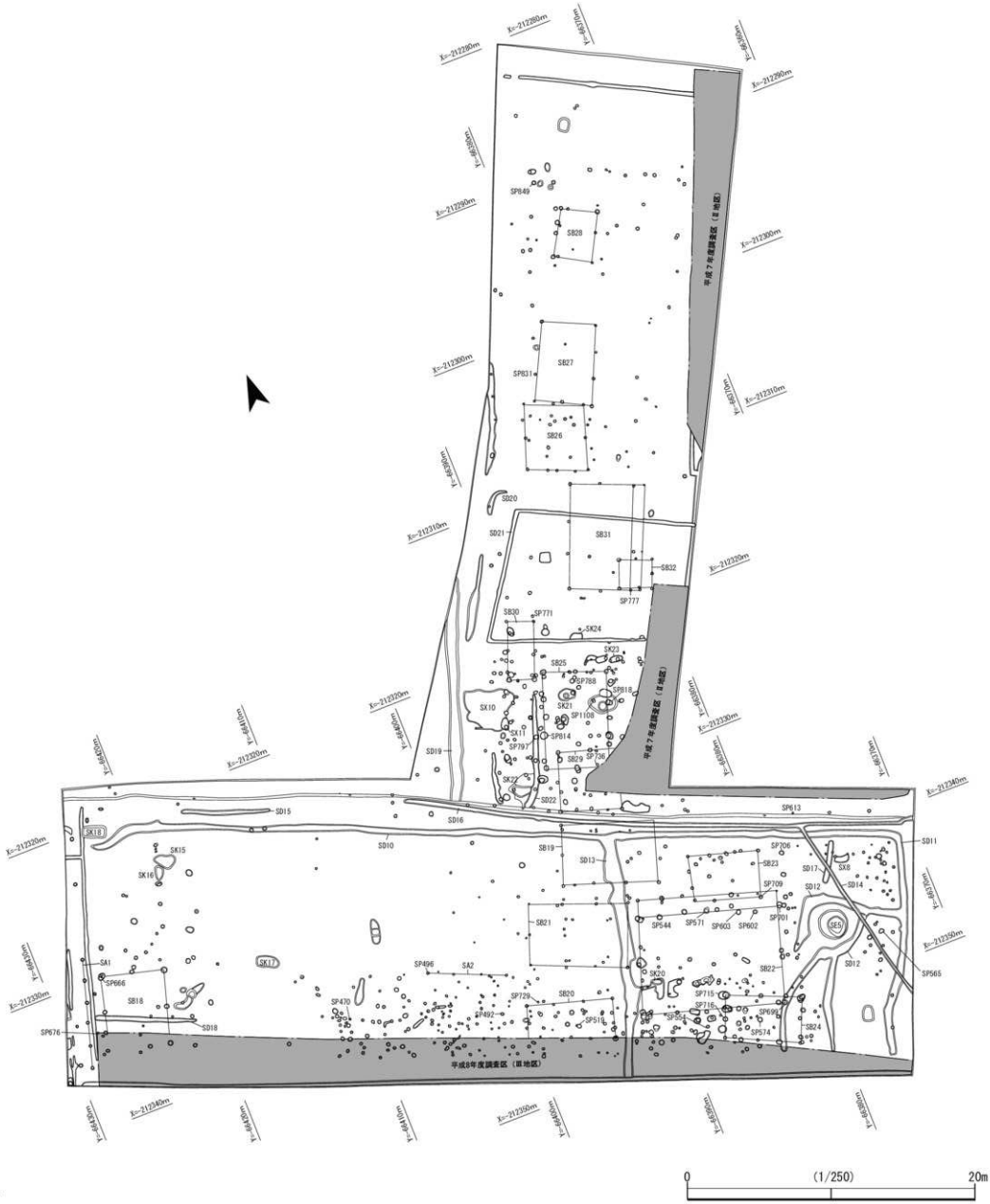


図13　XV地区遺構配置図

大きく、根石が置かれおり、比較的しっかりとした建物であったと考えられる。各柱穴から土師器や青磁のほか、永楽通寶が出土していることから、この建物は15世紀以降の中世後半期に属するものであると考えられる。

ＳＢ26（図16）XV地区北半部の中央に位置する建物跡で、桁行２間（4.6m）×梁行２間（4.2m）、床面積19.32㎡を測り、平面形状はややいびつである。棟方向はＮ15° Ｅで、隣接するSB27とほぼ同じである。出土遺物がほとんどないため、所属年代を確定することができない。

ＳＢ27（図16　図版７）XV地区北半部の中央に位置する建物跡で、桁行３間（5.6m）×梁行２間（4.0m）、床面積22.40㎡を測る。棟方向はＮ25° Ｅ。土師器の甕や、杯破片などが出土しているが、詳細な年代については不明である。

ＳＢ30（図17）XV地区北半部の南側に位置する建物跡で、桁行２間（4.1m）×梁行１間（1.8m）、床面積7.38㎡を測り、XV地区の中では最も小規模である。棟方向はＮ22° Ｅで、隣接するSB31とほぼ同じである。

ＳＢ31（図17）XV地区北半部の南側に位置する建物跡で、桁行３間（7.3m）×梁行２間（4.3m）、床面積31.39㎡を測る。棟方向はＮ25° Ｅ。東面に廂（0.７m）を有する。柱穴より中世の土師器杯が出土しており、建物の時期を示している。

②土坑

ＳＫ17（図18　図版10）XV地区南半部の西側に位置し、平面形は長軸157cm、短軸82cmの隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、深さは11cmを測る。遺構南西部で完形に復元できる土師器皿が一枚出土している。土坑の形態や、土師器皿の出土状況を踏まえれば、墓の可能性もあるが、とりあえず土坑として報告する。

ＳＫ21（図18　図版10）XV地区北半部南側の遺構密集区に位置し、平面形は長軸128cm、短軸75cmの不整楕円形を呈する。深さは31cmを測り、底面からさらに２つのピット（深さ22cmと28cm）が掘り込まれていた。大小の礫４個が床面から浮いた状態で検出されており、これらは掘立柱建物の根石であった可能性が高い。

ＳＫ22（図18　図版10）XV地区北半部南側の遺構密集区に位置し、平面形は、長軸120cm、短軸89cmの不整円形を呈し、深さは14cmを測る。埋土は３層に分層され、第２層には炭や焼土が多く含まれている。また埋土の最上面に土師器杯が据えられたような状態で出土している。この出土遺物から中世の遺構であると判断できる。

③井戸

ＳＥ５（図19　図版11）XV地区南半部の東端に位置する素掘りの井戸である。平面形は、長軸210cm、短軸195cmのほぼ円形を呈する。深さは90cmを測る。埋土は１～12層に分層されるが、木枠の痕跡などは確認できず、抜き取られたものと思われる。土師器皿や瓦質土器などが出土しており、これらの遺物から中世後半期の所産と考えられる。

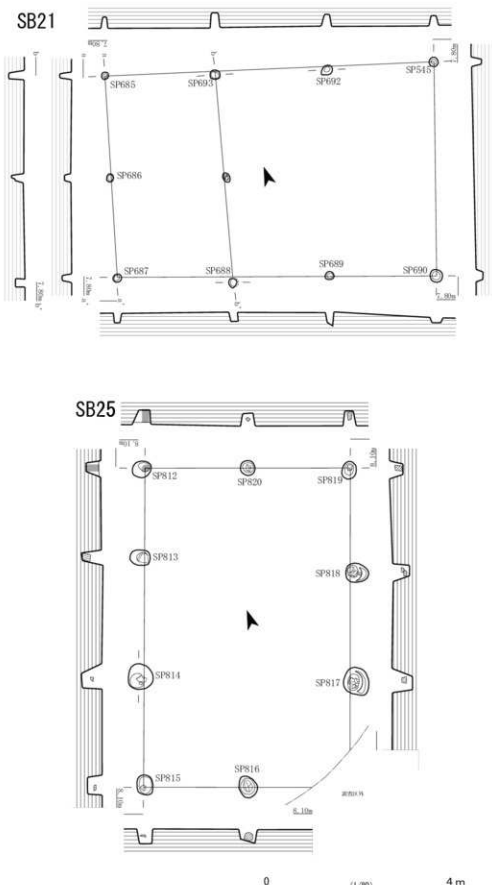


図14　Ⅻ地区検出遺構（1）

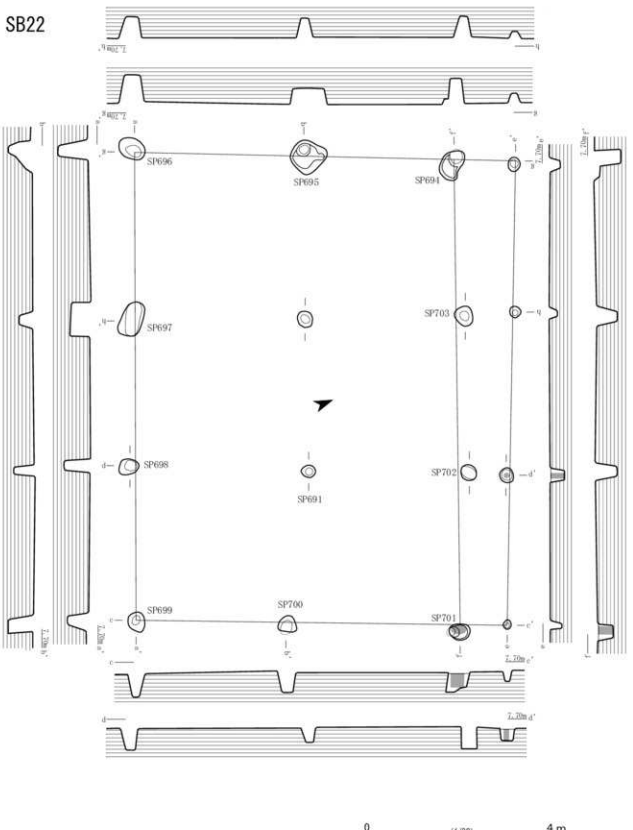


図15　XV地区検出遺構（2）

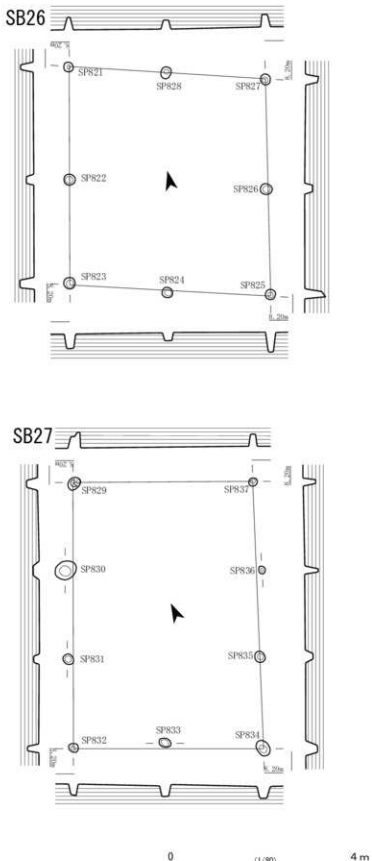


図16　Ⅻ地区検出遺構（3）

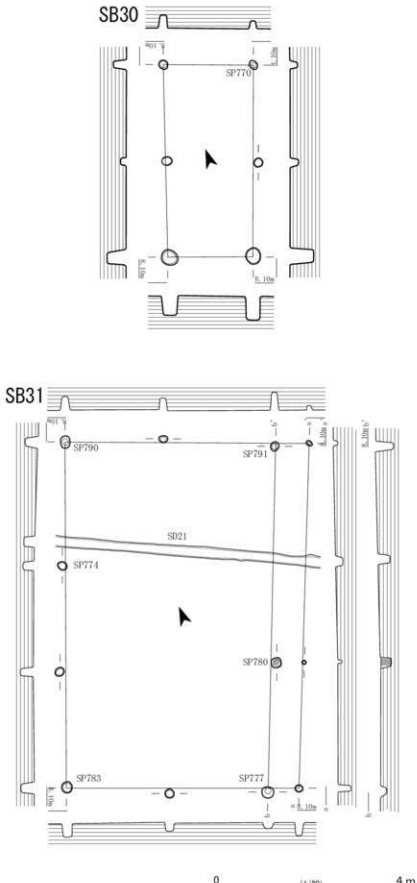


図17　Ⅻ地区検出遺構（4）

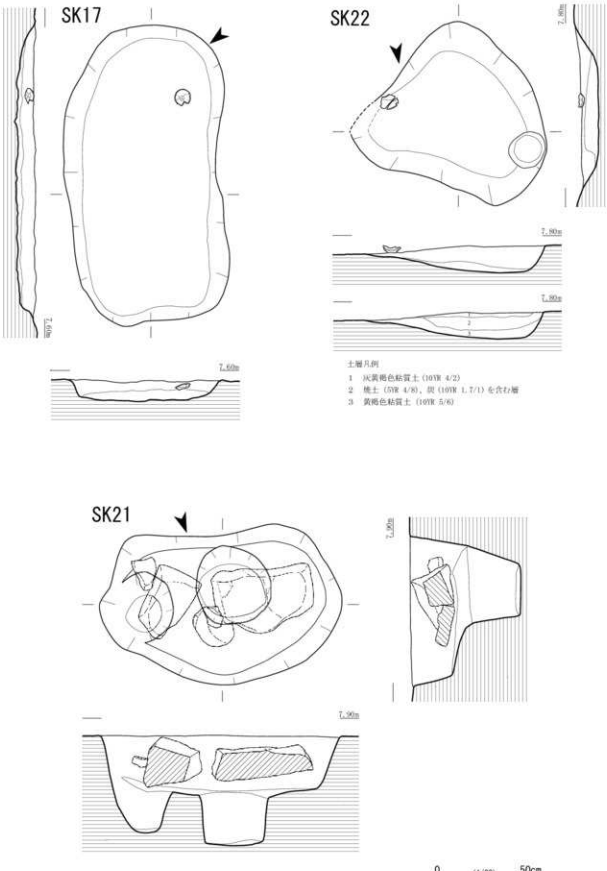


図18 XV地区検出遺構 (5)

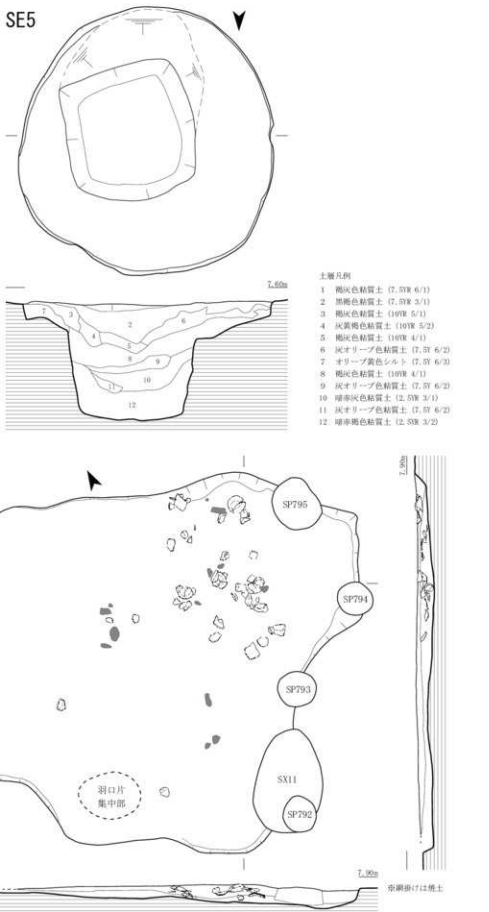


図19　XV地区検出遺構（6）

④性格不明遺構

ＳＸ10(図19　図版15・16) Ⅳ地区北半部南側の遺構密集区に位置する。平面形は、長軸306cm、短軸270cmの不整円形を呈する。底面はやや凹凸があり、深さは14cmを測る。掘り込みは全体的に浅く、炭や焼土が全面的に認められる。なお本遺構の南隅で重複関係にあるSX11は、埋土の類似や深さから本遺構と一連のものの可能性もあるが、取りあえず現場での所見を重視し、別遺構として扱っておきたい。遺構の東半部では須恵器、土師器などとともに羽口や炉壁の一部、鉄釘などがまとまって出土している。また、南西隅では床面の一部が皿状に浅く掘り込まれ、その部分に炉壁や羽口等の鋳造関連遺物がまとめて廃棄してある。

(3) Ⅻ地区遺構

Ⅻ地区では掘立柱建物５棟を復元し、井戸１基、土坑１基、溝状遺構１条を検出した(**図20**)。掘立柱建物跡は調査区西側に集中しており、複数回の建て替えが想定される。また井戸であるSE６は遺構の配置状況からみて、こうした建物群の居住者によって管理されていたものと考えられる。同時期併存の建物が何棟であったのか確定できないが、２棟程度の併存が想定され、中世集落の基本的な構成単位として本事例を捉えることができる。溝状遺構のSD23は中世後半期の所産と考えられるが、掘立柱建物に付随するものではないようである。また１基のみ確認された土坑SK25からは、やはり中世後半期の土師器杯が出土しており、掘立柱建物とほぼ同時期の所産であると考えられる。

①掘立柱建物跡

ＳＢ33(図21　図版７) Ⅻ地区西半部の遺構密集区に位置する総柱の建物跡で、桁行２間(4.6m)×梁行２間(3.8m)、床面積17.48㎡を測る。棟方向はＮ66°Ｗ。各柱穴から土師器や瓦質土器などが出土しており、中世の建物であると考えられる。

ＳＢ35(図21　図版７) Ⅻ地区西半部の遺構密集区に位置する建物跡で、桁行２間(4.2m)×梁行２間(3.0m)、床面積12.60㎡を測る。棟方向はＮ69°Ｗで、隣接するSB36とほぼ同じである。南面に0.9mの廂を有する。柱穴の形状から考えて、同一地点における建て替えが行われていたとみられる。各柱穴から土師器杯、青磁椀、足鍋片など、比較的豊富に遺物が出土しているが、とりわけ墨書土師器皿の出土は注目される。こうした出土遺物から中世後半期に比定される。

ＳＢ37(図21) Ⅻ地区北東部に位置する建物跡で、桁行２間(2.6m)×梁行２間(2.4m)、床面積6.24㎡を測る。棟方向はＮ24Ｅ°で、Ⅻ地区で復元された５棟の中では最も小規模である。出土遺物から中世のものと考えられ、納屋のような役割をもつ建物だったのではないかと推測している。

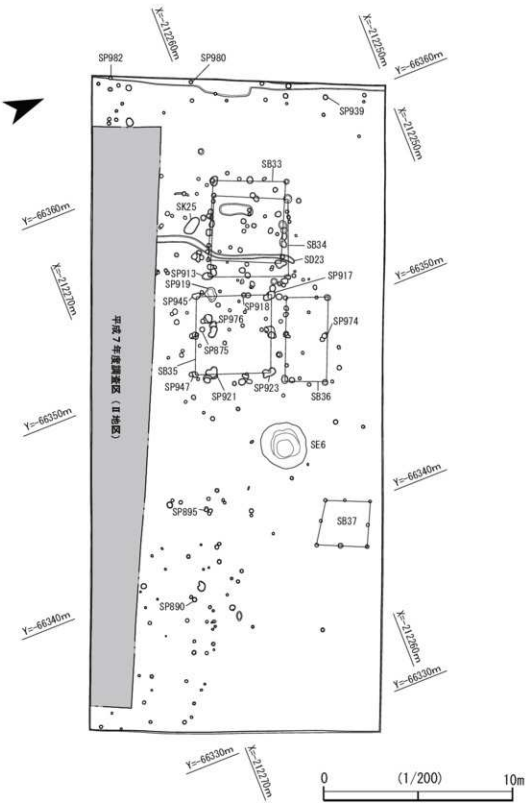


図20　Ⅻ地区遺構配置図

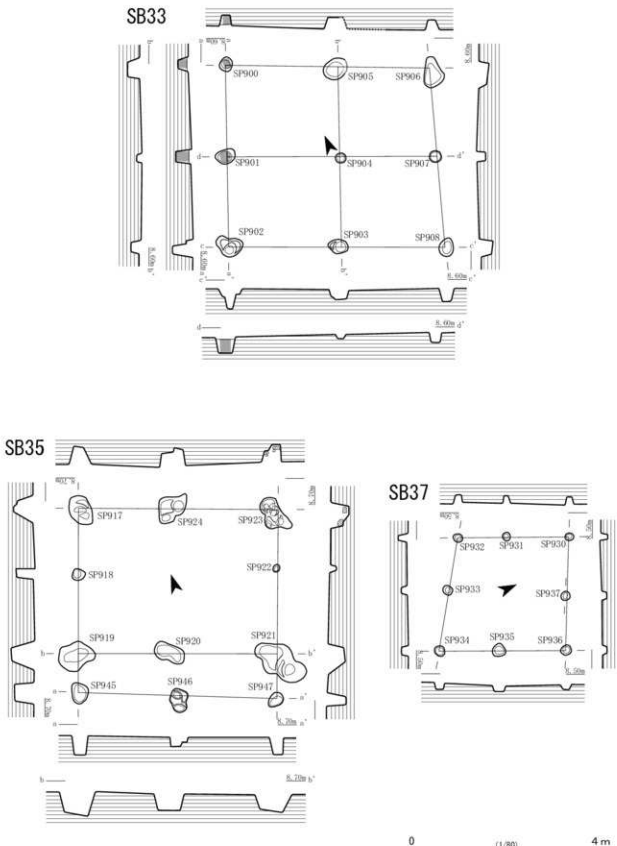


図21　XII地区検出遺構（1）

②井戸

ＳＥ６（図22　図版11）Ⅻ地区中央部に位置する井戸である。平面形は、長軸263㎝、短軸236㎝のほぼ円形を呈する。深さは128㎝を測る。埋土は３層に分けられ、礫が北側の縁辺部を中心として廃棄されている。土師器杯や瓦質の擂鉢や焙烙など比較的豊富な遺物が出土しており、これら遺物から中世後半期に使用・廃絶された井戸と考えられる。

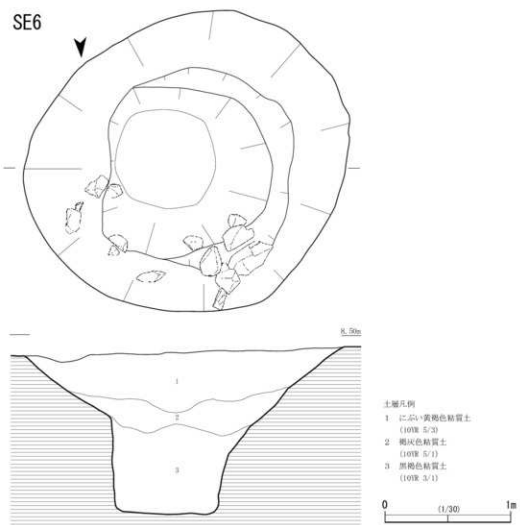


図22　Ⅻ地区検出遺構（2）

表1　掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	地区	規模（間）	棟方向	柱間 桁行	柱間 梁行	面積（㎡）	出土遺物	備考
				建物の南東隅から(m)	建物の南東隅から(m)			
SB1	Ⅷ	3×3	N72°W	7.0（2.4・2.3・2.3）	5.4（1.8・1.9・1.7）	37.80	土師器　須恵器　黒色土器	古代
SB2	Ⅷ	3×2	N71°W	6.6（2.4・2.4・1.8）	4.4（2.2・2.2）	29.04	土師器　須恵器 黒色土器　灰釉陶器	
SB3	Ⅷ	3×2	N73°W	6.4（2.2・2.3・1.9）	2.7（1.5・1.2）	17.28	土師器　黒色土器	古代
SB4	Ⅷ	3×2	N70°W	6.7（2.5・2.2・2.0）	4.8（2.9・1.9）	32.16	土師器　須恵器　黒色土器	北面に廂（1.4m）
SB5	Ⅷ	2×2	N22°E	4.5（2.2・2.3）	2.8（1.4・1.4）	12.60	土師器　黒色土器	
SB6	Ⅷ	2×2	N16°E	6.0（2.9・3.1）	4.1（2.0・2.1）	24.60	土師器　黒色土器	中世
SB7	Ⅷ	6×2	N79°W	15.0（2.4・2.5・2.4・2.6・2.5・2.6）	4.6（2.4・2.2）	69.00	土師器　須恵器 黒色土器　緑釉陶器	一面廂建物の可能性あり 古代
SB8	Ⅷ	3×2	N75°W	6.8（2.3・2.3・2.2）	4.2（2.1・2.1）	28.56	土師器　須恵器　黒色土器 緑釉陶器　灰釉陶器	古代
SB9	Ⅷ	4×2	N75°W	9.6（2.3・2.4・2.4・2.5）	4.4（2.2・2.2）	42.24	土師器　須恵器 黒色土器　緑釉陶器	古代
SB10	Ⅷ	5×2	N76°W	12.5（2.4・2.4・2.6・2.6・2.5）	4.6（2.4・2.2）	57.50	土師器　須恵器　黒色土器 緑釉陶器　灰釉陶器	南面に廂（1.2m） 北面に廂（1.1m）古代
SB11	Ⅷ	3×2	N14°E	6.9（2.2・2.4・2.3）	4.6（2.0・2.6）	31.74	土師器　須恵器　黒色土器 緑釉陶器　灰釉陶器	柱間南西隅から　古代
SB12	Ⅷ	2×1	N10°E	4.7（2.3・2.4）	2.0	9.40	土師器　黒色土器 緑釉陶器　灰釉陶器	古代
SB13	Ⅷ	2×2	N18°E	5.2（2.5・2.7）	4.0（2.1・1.9）	20.80	土師器　黒色土器 瓦質土器	中世
SB14	Ⅷ	3×2	N75°W	6.6（2.2・2.0・2.4）	5.1（2.6・2.5）	33.66	土師器　須恵器	柱間北東隅から
SB15	Ⅷ	3×2	N18°E	6.2（2.1・1.9・2.2）	4.7（2.5・2.2）	29.14	土師器　須恵器 瓦質土器　黒曜石	中世
SB16	Ⅷ	2×1	N17°E	3.7（1.6・2.1）	2.3	8.51	土師器	
SB17	Ⅷ	3×1	N18°E	7.0（2.2・2.4・2.4）	3.8	26.60	土師器　黒色土器	東面に廂（0.8m）古代
SB18	Ⅸ	2×2	N14°E	5.2（2.5・2.7）	4.5（2.3・2.2）	23.40	土師器　須恵器	柱間南東隅から
SB19	Ⅸ	3×2	N71°W	6.6（2.1・2.2・2.3）	4.2（2.2・2.0）	27.72	土師器　須恵器	柱間南西隅から
SB20	Ⅸ	（3×1）	N74°W	6.1（2.1・2.0・2.0）	—	—	土師器等	柱間北東隅から 梁行…調査区外
SB21	Ⅸ	3×2	N70°W	6.8（2.4・2.1・2.3）	4.2（2.1・2.1）	28.56	土師器等	柱間南西隅から
SB22	Ⅸ	3×2	N68°W	9.8（3.2・3.0・3.6）	6.8（3.2・3.6）	66.64	土師器　須恵器　瓦質土器	北面に廂（1.3m）　中世
SB23	Ⅸ	3×3	N67°W	4.7（1.4・1.6・1.7）	3.1（0.9・1.2・1.0）	14.57	土師器　須恵器　陶器	柱間南西隅から　中世
SB24	Ⅸ	2×2	N70°W	5.2（3.0・2.2）	3.0（1.6・1.4）	15.60	土師器　須恵器　瓦質土器 青磁　陶器	中世
SB25	Ⅸ	3×2	N20°E	6.7（2.2・2.6・1.9）	4.4（2.2・2.2）	29.48	土師器　須恵器　瓦質土器 青磁　渡来銭	柱間南西隅から　中世
SB26	Ⅸ	2×2	N15°E	4.6（2.3・2.3）	4.2（2.2・2.0）	19.32		
SB27	Ⅸ	3×2	N25°E	5.6（2.0・1.8・1.8）	4.0（2.1・1.9）	22.40	土師器等	
SB28	Ⅸ	2×1	N30°E	3.5（2.1・1.4）	2.7	9.45	土師器	
SB29	Ⅸ	2×2	N71°W	4.3（2.1・2.2）	4.1（2.0・2.1）	17.63	土師器	柱間南西隅から
SB30	Ⅸ	2×1	N22°E	4.1（2.0・2.1）	1.8	7.38	土師器	
SB31	Ⅸ	3×2	N25°E	7.3（2.5・2.2・2.6）	4.3（2.0・2.3）	31.39	土師器　須恵器	柱間南西隅から 東面に廂（0.7m）中世
SB32	Ⅸ	2×2	N65°W	2.3（0.9・1.4）	2.0（1.0・1.0）	4.60	土師器	
SB33	Ⅸ	2×2	N66°W	4.6（2.3・2.3）	3.8（1.9・1.9）	17.48	土師器　瓦質土器	中世
SB34	Ⅸ	2×2	N22°E	4.4（2.2・2.2）	4.2（2.3・1.9）	18.48	土師器　須恵器　瓦質土器 青磁　白磁　陶器	中世
SB35	Ⅸ	2×2	N69°W	4.2（2.2・2.0）	3.0（1.8・1.2）	12.60	土師器　須恵器　瓦質土器 青磁　陶器	南面に廂（0.9m）　中世
SB36	Ⅸ	2×1	N67°W	4.3（2.4・1.9）	2.1	9.03	土師器　須恵器　瓦質土器	中世
SB37	Ⅸ	2×2	N24°E	2.6（1.2・1.4）	2.4（1.3・1.1）	6.24	土師器	中世

2　遺物

今回の調査で出土した主な遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器で、このほかに皇朝十二銭である延喜通寶、中世の輸入銭、また縄文時代草創期の有舌尖頭器などがある。ここでは調査区ごとに主な遺物について解説を加えたい。なお、各遺物の法量等については遺物観察表に掲載しているので併せて参照頂ければ幸いである。

(1) 凹地区出土遺物

1・2はSB１の各柱穴から出土した土師器椀である。３～６はSB７の各柱穴から出土したもので、３は緑釉陶器、４・６は土師器椀、５は土師質の香炉である。５の香炉は胎土が精選された非常に良質なつくりで、内底面は若干変色した使用痕跡が認められる。８～16はSB10から出土した遺物であるが、このうち８～10は遺構の解説時に述べたようにSB７に構成される可能性が残されている柱穴からの出土である。８・11・12は土師器杯で、いずれも体部が直線的に立ち上がり、灰白色系の色調を呈する。９は全体的な器形が明らかではないが、土師質土器の脚部である。14は須恵器の短頸壺と考えられるが、破片資料のため全形は不明。15は緑釉陶器の皿で、胎土は土師質である。16は黒色土器で内面のみが黒色処理されている。17はSB11から出土した土師質土器の甕である。18～20はSB12から出土したもので、18は灰釉陶器、19は土師器杯底部、20は緑釉陶器で、近江型の可能性がある。21・22はSB17から出土した土師器皿で、前者は橙色系、後者は灰白色系の色調を呈する。

23～41は各柱穴から出土した遺物である。32は土製円盤で、土師器底部の転用品であろう。34・35は白磁片で、35は外面に縦櫛花弁文が認められる。36は青磁椀で、胎土は粗く、黒色粒子を多量に含む。越州窯系。37の須恵器長頸壺はSB８の柱穴から出土したものであることが最終的に判明した。

42～56は各土坑から出土した遺物である。43～47はSK７出土土器で、43・44は土師器杯、45・46は土師器椀、47は黒色土器である。49～56はSK10出土土器で49は皿、50～53は杯でいずれも橙色系の色調を呈する。54～56は足鍋で、54・55は土師質、56は瓦質焼成である。

57～62はST１から出土した遺物群である。57・58は土師器皿で、58の底部には焼成後の穿孔が施されている。59は土師器杯で、底部は円盤高台状を呈する。これらの皿、杯はいずれも橙色系の色調を呈する。60は金銅製の棒状製品であり、一部に金箔が残存している（図の網掛け部）。同一個体と考えられる破片が存在し、写真図版20に示しているが、残存状況が不良のため保存処理を実施中である。61・62はいずれも延喜通寶で、径2.0cm。前者は1.6g、後者は1.3gを測る。

63～67は各溝から出土した遺物で、63は鎬蓮弁をもつ青磁、64は須恵器杯、65は瓦質の甕で、頸部にはタタキ痕が認められる。67の足鍋は瓦質焼成である。

68～81は井戸出土遺物。68～77はSE１から出土したもので、73・74の土師器椀は胎土が精選された白色系の優品である。両者の色調や器形、74の内面に認められるヘラによる沈線文様等から、白磁の模倣品であることが窺われる。11～12世紀代の所産であろう。75は須恵質の甕胴部片で内外面にタタキ痕が認められる。77は丸瓦片で、凸面に平行タタキ痕、凹面には粘土紐の痕跡が確認できる。78～81はSE２出土遺物で、78は器壁の極めて薄い土師器皿、79は脚付きの土師質土器である。

82～96は性格不明遺構から出土した資料である。83～90はSX６から出土したもので、85は土師器椀

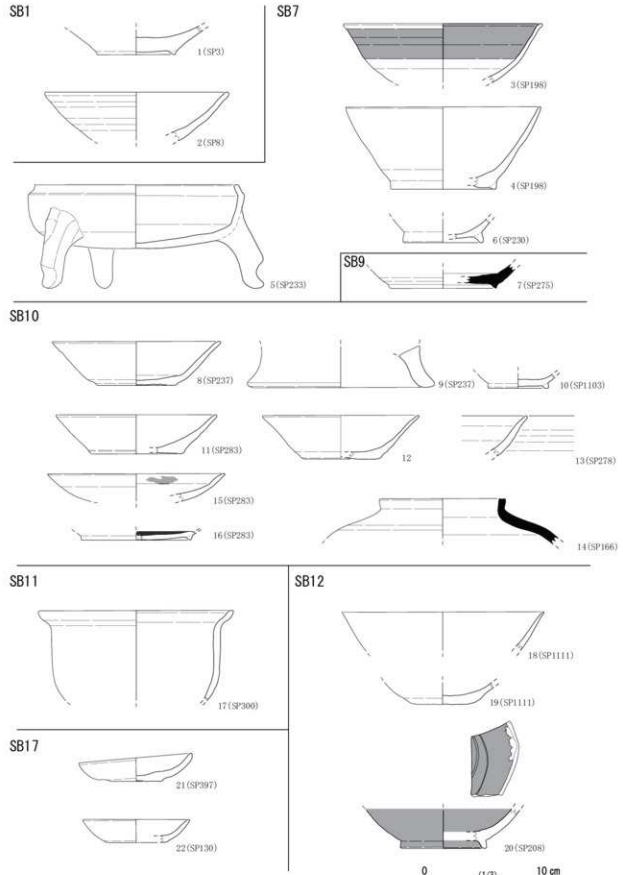


図23　邛地区出土遺物（1）

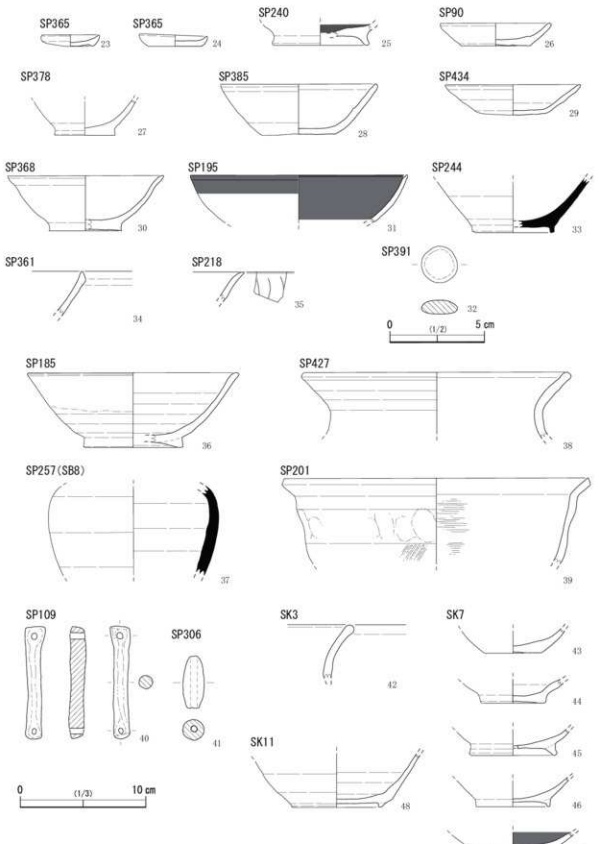


図24　邛地区出土遺物（2）

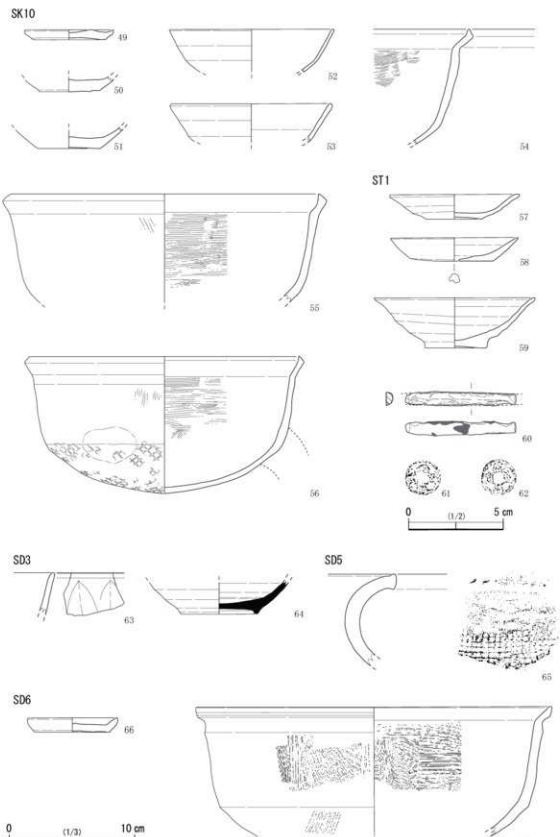


図25　邛地区出土遺物（3）

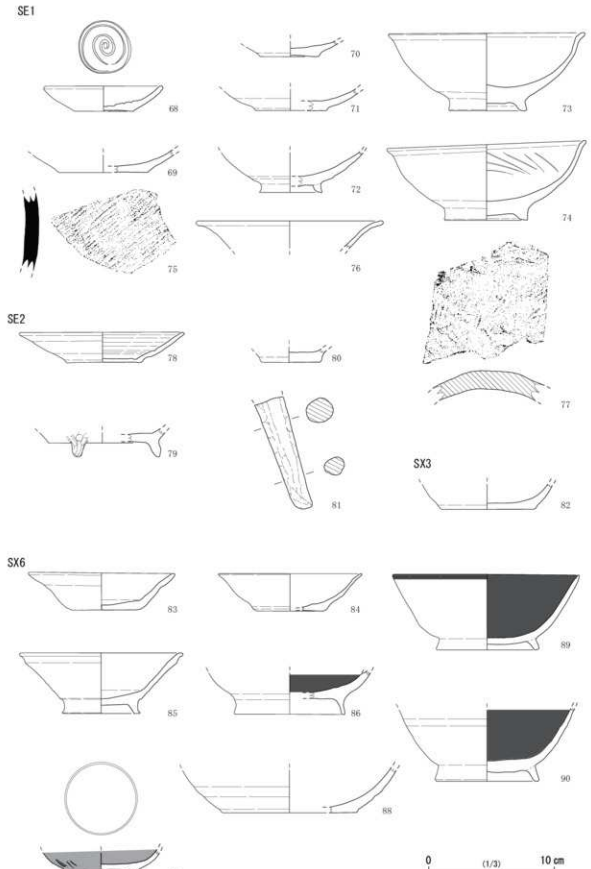


図26　邛地区出土遺物（4）

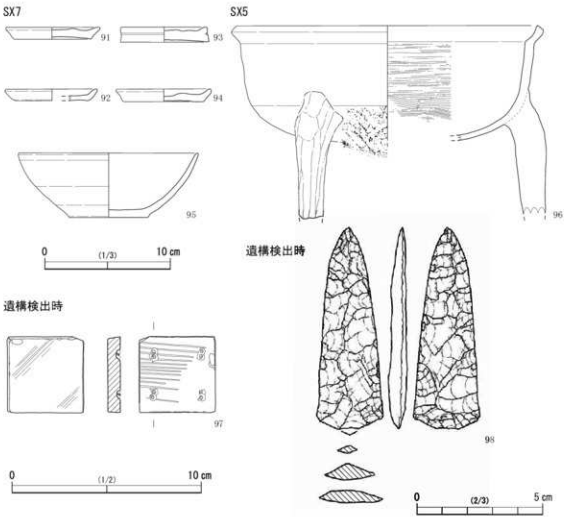


図27　ⅩⅣ地区出土遺物（5）

であるが、内外面ともに褐色系の色調を呈する。86･89･90は黒色土器で、86は高台部が高く形成されている。87は緑釉陶器の椀で、胎土が灰色系の近江型と推定される資料である。外面に２本１組の櫛描き文状の文様が認められる。88は瓦質の鉢で、底部には回転糸切りの痕跡がわずかに認められる。91～95はSX７から出土。91～94の皿はすべて橙色系の色調を呈し、95は体部が内湾気味に立ち上がる杯。こうした器種構成から、これらの遺物群は墓の副葬品であった可能性が高い。96はSX５から出土した足鍋で、土師質焼成。内面には横方向のハケ目痕が残る。

97･98は遺構検出中に出土した石製品。97は石鋲の一部で、巡方にあたる。粘板岩の石材を用い、潜り穴が４つ穿たれている。また石挽き鋸の切断痕も確認できる。一辺４cmの正方形を呈し、重量26.9g。98は有舌尖頭器で、安山岩製。裏面の一部に素材面を残し、基部と先端部を中心に丁寧な樋状剥離が施されている。長さ8.0cm、最大幅2.6cm、厚さ0.7cm、重量14.3gを測る。

(2) ⅩⅤ地区出土遺物

99～109は各掘立柱建物出土遺物である。99はSB18の柱穴から出土した橙色系の土師器皿。

100·101はSB22の柱穴から出土した遺物で、100は土師器杯、101は瓦質土器の擂鉢と考えられる。103·104はSB24に属する遺物で、103は土師器杯、104は瓦質焼成の鍋口縁部である。105～107はSB25にともなう遺物で、このうち105·107は同じ柱穴であるSP814から出土した。105は青磁大皿の底部で、灰白色の陶土に濃緑色の釉薬が厚くかけられている。内面に蓮弁状の文様が認められる。この青磁大皿と共伴して出土したのが107の永楽通寶である。永楽通寶の初鋳は1408年であり、SB25の構築上限時期を規定する重要な出土遺物である。106は土師質の鉢と考えられ、内面の一部に橙色の化粧土が認められる。108はSB27に伴う土師器甕、109はSB31に伴う土師器杯である。

110～134には各柱穴から出土した遺物を掲載した。114～116は薄手の土師器杯で、中世後半期の所産、117～121は古代末～中世前半期に比定される土師器杯・椀で、117·119·121は橙色系、118·120は灰白色系の色調を呈する。122は土師器の椀であるが、高台部は痕跡的にしか残存しない。125はSP613より出土した土師器鉢。口縁部が意図的に打ち欠かれており、なんらかの祭祀に使用されたものである可能性が高い。形態や胎土などからみて古墳時代の所産と考えているが判然としない。126は土師器の小型甕で、外面にはハケ目調整痕がかすかに認められる。131はSP574より出土した瓦質焼成の大型鉢。内面には横方向の細かいハケ目調整が施されている。

135～138は各土坑出土遺物。135はSK17出土の土師器皿で色調は灰白色系。136はSK21から出土した土師器杯と考えられる。形態的に異質で、外面は灰色系の色調を呈する。137·138はSK22から出土したもので、137は灰白色系の土師器杯、138は瓦質焼成の鉢である。

139·140はSE５から出土したもので139は土師器皿、140は瓦質の擂鉢である。141はSD10出土の青磁皿で外面は胴屈曲部まで施釉が為されている。龍泉窯系か。142は瓦質焼成の足鍋で、内外面にハケ目調整が施されている。外面は煤(すす)の付着が顕著。

143～181はSX10から出土した土器類である。143～151は土師器杯で、全体的な器形は体部が斜め上方に直線的に立ち上がる形態を呈する。底部の切り離しは回転ヘラ切りによって行われており、糸切り痕は認められない。152·153は土師器椀で、全形は斜め上方に直線的に立ち上がる形態である。ただし153に関しては焼成不良の須恵器である可能性もある。また173は橙色を呈する土師器皿で、口縁部にむけて内湾ぎみに立ち上がる。154～159は須恵器杯蓋で、154·155のように口縁部の屈曲が認められるものと、156～159のように消滅したものの２種がある。160～172は須恵器杯身で、160～166は無高台、167～172は高台を有するものである。無高台のものは底部には回転ヘラ切り痕を残すものが多い。また、160·165は焼成不良のもので、167も器形のひずみが著しい。174は須恵器皿で、体部は強く外反する形態を呈する。底部に回転ヘラ切り痕が認められ、焼成は不良。175～177は緑釉陶器で、175は皿、176·177は瓶類の底部であると考えられる。176の内面は無釉であるが、浅橙色を呈する化粧土が施されている。178～180は須恵器の甕で、180は外面に平行タタキ痕、内面に同心円状の当て具痕が残存する。181は土師器甕の胴部で、外面に横方向の指ナデ痕や縦方向のハケ目痕が認められる。以上に記した土師器、須恵器、緑釉陶器の型式学的特徴は９世紀代を中心としつつ、一部10世紀代に降る年代的位置づけを示している。

182～184·186·187もSX10から出土したもので、182は土師質の土錘、186·187は鉄釘である。183は坩堝の底部片と考えられるもので、内底面には炉壁の一部らしきものが付着している。184は羽口で、

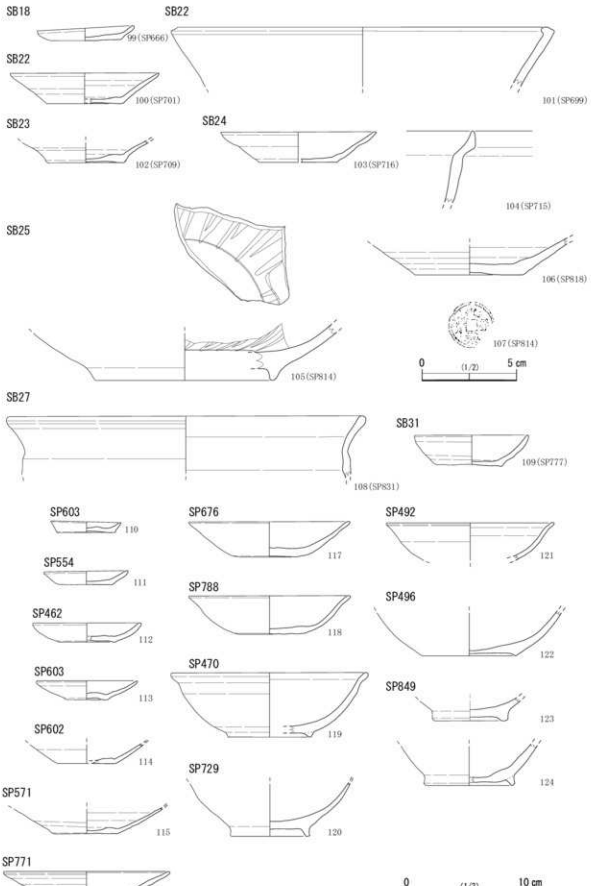


図28　XV地区出土遺物（1）

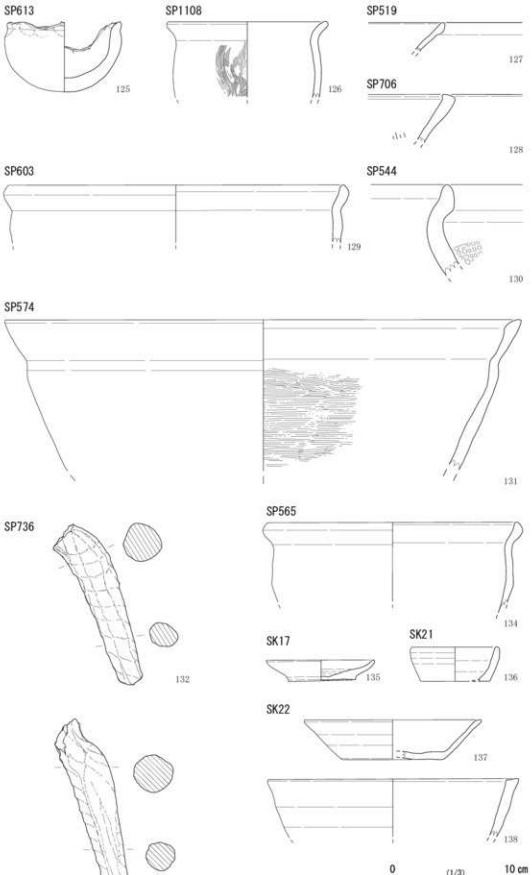


図29　Ⅳ地区出土遺物（2）

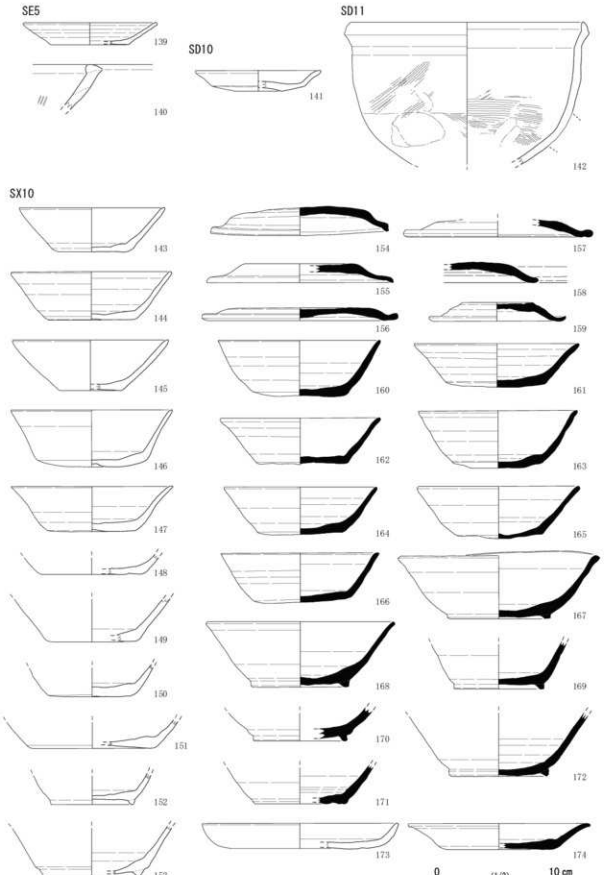


図30　Ⅺ地区出土遺物（3）

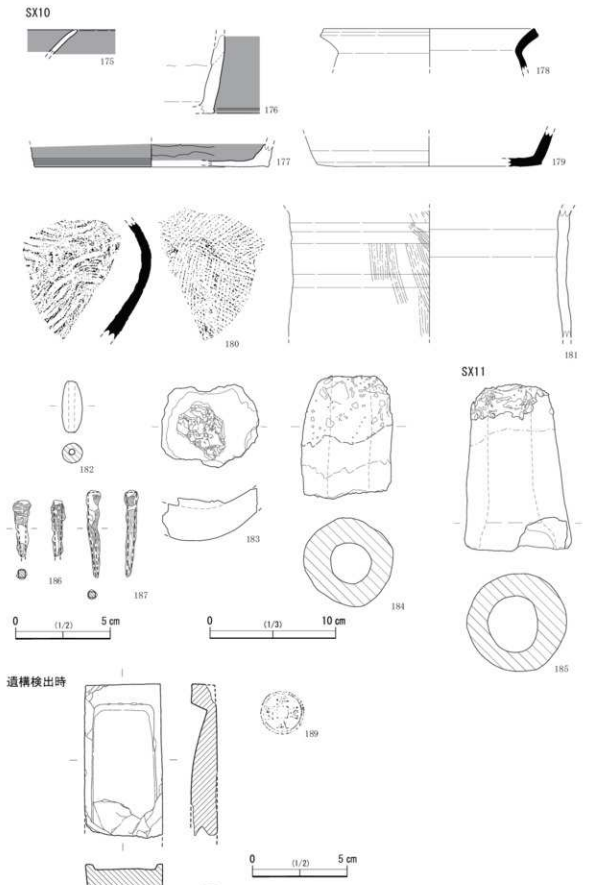


図31　XV地区出土遺物（4）

先端部にはガラス化したスラグが付着し、胎土にはスサなどの炭化物や石英粒などが含まれる。185も羽口であり、SX11から出土した。遺構の項でも述べたように、SX11はSX10と同一遺構になる可能性があり、出土遺物においても共通点がある。なお、こうした坩堝と羽口の製作技法は周防鋳銭司出土のものと類似している。

188・189は遺構検出中の遺物。188は赤間硯、189は洪武通寶である。

(3) Ⅻ地区出土遺物

190～204は掘立柱建物から出土した遺物である。190はSB34の柱穴から出土した蓮弁文をもつ青磁椀。191～202はSB35の各柱穴から出土。191は土師器皿で、灰白色系の色調を呈する。192～196は土師器杯で、口径は11cm～12cm代。いずれも器壁のつくりが薄く、中世末期に比定される。なお195は内底面に炭化物のようなものが付着している。198は土師器皿で底部外面に墨書が認められる。「五ッ」もしくは「吾」と判読できる可能性が高い。199は青磁椀で、残存状況は良好。外面に線刻による蓮弁文、内面見込みに花文が施されている。龍泉窯系で14世紀代の所産であろう。200・201は足鍋片で、前者は瓦質、後者は土師質である。202は土師器甕で、復元口径が約32cmになる大型品である。タタキやハケ目調整痕がかすかに認められるが、基本的にはナデ調整により丁寧に仕上げられている。また胴部外面には帯状に二次焼成痕が認められる。この甕は古代の所産である可能性が高く、混在資料であると考えている。203・204はSB36出土遺物で、203は橙色系の土師器杯、204は瓦質土器の鉢もしくは焙烙である。

205～213は各柱穴ならびに土坑出土資料。205・206は土師器皿であり、205は黄橙色系の色調で、底部は若干上げ底気味を呈する。また206は口縁端部の内外面に煤が付着しており、灯明皿として用いられていたものと考えられる。207～209は土師器杯で、いずれも器壁は薄く、丁寧なつくりである。209の外底部には板目圧痕が確認できる。210は土師器杯で、色調は灰白色系である。器壁は比較的厚めで、底部は若干上げ底気味である。211は柱状高台の杯で、色調は橙色。外底部には回転糸切り痕が残る。212は浅黄橙色を呈する土師器椀で、内底部にはミガキの痕跡が認められる。213はSK25から出土した土師器杯。橙色を呈し、器壁は薄く仕上げられ、外底部には回転糸切り痕と板目圧痕が認められる。

214・215はSD23から出土した。214は土師器杯で、器壁は薄く、外底部には板目圧痕が認められる。215は青磁椀で、口縁部は外反し、胴下半部に数条の沈線がめぐる。

216～224はSE６から出土した遺物である。216～218は土師器皿で、いずれも口径が11.2cm程度で規格性が高い。また、いずれも灰白色系の色調を呈す。218は完形品で胎土も精良である。219は足鍋の口縁～胴部で土師質焼成。外面の一部に煤が付着している。220・221は瓦質の擂鉢で、両者は同一個体の可能性がある。擂目は６条１単位で、221の底部外面には板状の圧痕が残る。222は瓦質の大型甕で復元口径は50cmに近い。223は瓦質土器の焙烙と考えられ、底部付近に指オサエの痕跡あり。224は青磁椀で、高台のつくりや釉調などから、越州窯系と考えられる。

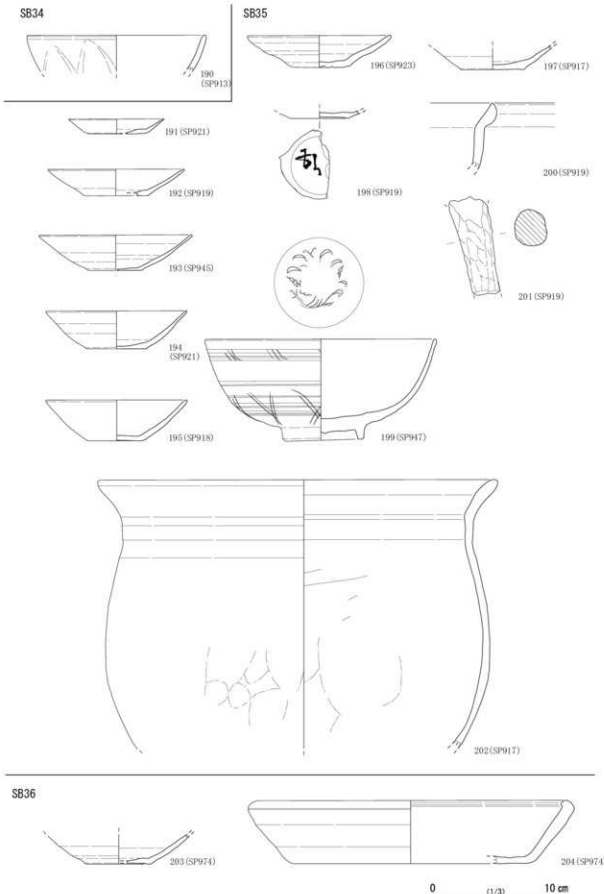


図32　邛地区出土遺物（1）

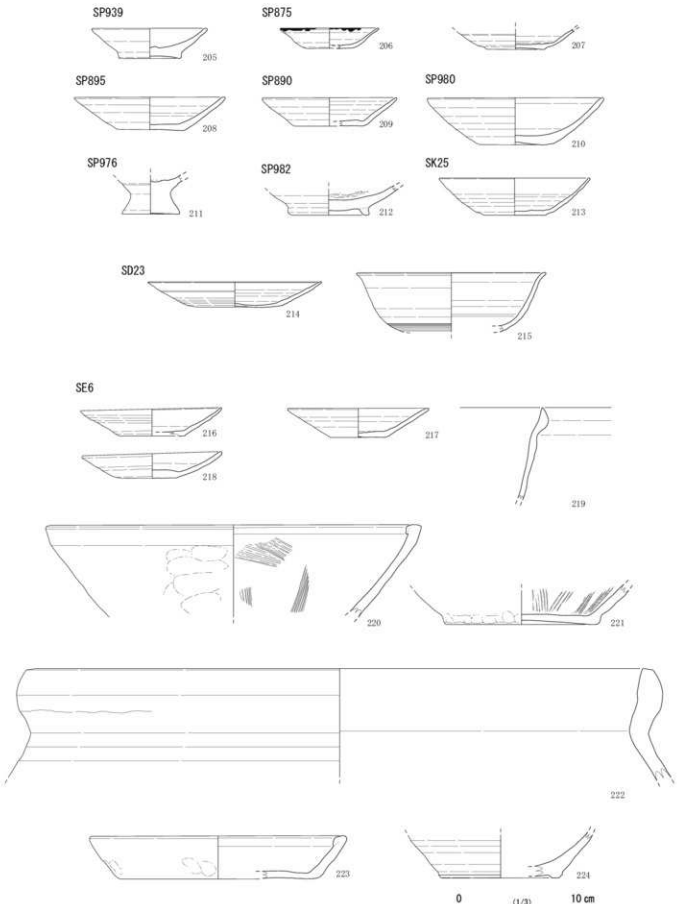


図33　Ⅻ地区出土遺物（2）

表2　出土土器・土製品観察表

番号	地区	遺構	器種	器形	法量（cm）			焼成	色調		調整	
					口径	器高	底径		内面	外面	内面	外面
1	第	SI81(SP3)	土師器	椀	－	1.9残	(6.2)	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、赤切り後ナデ
2	第	SI81(SP8)	土師器	椀	(14.7)	3.8残	－	やや軟質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ
3	第	SI87(SP198)	緑釉陶器	椀	(16.0)	4.7残	－	硬質	胎土：明青灰色	釉：灰白色	回転ナデ	回転ナデ
4	第	SI87(SP198)	土師器	椀	(15.6)	6.6	(8.4)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
5	第	SI87(SP233)	土師器土器	香炉	16.2	8.3	－	硬質	灰白色	淡黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、ヘラキズリ後ナデ
6	第	SI87(SP230)	土師器	椀	－	1.6残	(6.3)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
7	第	SI89(SP275)	須恵器	杯	－	1.5残	(8.4)	硬質	青灰色	青灰色	回転ナデ	回転ナデ
8	第	SI87・10(SP237)	土師器	杯	(13.5)	3.5	(6.2)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り、板目
9	第	SI87・10(SP237)	土師質土器	鉢台	－	3.3残	(15.0)	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ
10	第	SI87・10(SP1103)	土師器	椀	－	0.9残	4.8	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
11	第	SI810(SP283)	土師器	杯	(12.8)	3.1	(7.2)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
12	第	SI810(SK8)	土師器	杯	(12.6)	3.5	(6.4)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラ切り
13	第	SI810(SP278)	土師器	椀？	－	3.2残	－	やや軟質	橙色	灰白色	回転ナデ後ナデ	回転ナデ後タテハケ
14	第	SI810(SP166)	須恵器	短頸壺	(10.0)	3.2残	－	硬質	青灰色	青灰色	回転ナデ	回転ナデ
15	第	SI810(SP283)	緑釉陶器	皿	(14.2)	2.2残	－	やや軟質	胎土：灰白色	釉：淡黄緑色	回転ナデ	回転ナデ
16	第	SI810(SP283)	黒色土器	椀	－	0.6残	8.8	硬質	黒色	赤褐色	回転ナデ	回転ナデ
17	第	SI811(SP300)	土師質土器	甕	(15.6)	7.2残	－	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ
18	第	SI812(SP1111)	灰釉陶器	椀	(16.2)	3.1残	－	硬質	胎土：灰黄色	釉：灰黄色	回転ナデ	回転ナデ
19	第	SI812(SP1111)	土師器	杯	－	1.3残	4.1	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
20	第	SI812(SP208)	緑釉陶器	椀	－	3.1残	6.0	硬質	胎土：灰色	釉：黄緑色	回転ナデ	回転ナデ
21	第	SI817(SP397)	土師器	皿	9.1	2.3	4.0	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
22	第	SI817(SP130)	土師器	皿	(8.6)	1.9	(4.8)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
23	第	SP365	土師器	皿	4.7	0.8	4.1	やや軟質	橙色	橙色	回転ナデ後ナデ	回転ナデ後ナデ
24	第	SP365	土師器	皿	5.5	1.0	4.2	やや軟質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
25	第	SP240	黒色土器	椀	－	1.3残	7.7	やや軟質	黒褐色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
26	第	SI90	土師器	杯	(8.8)	1.8	5.4	やや軟質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ
27	第	SP378	土師器	椀	－	3.4残	6.2	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
28	第	SP385	土師器	杯	12.4	4.1	6.0	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
29	第	SP434	土師器	杯	10.8	2.4	6.0	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、ナデ
30	第	SP368	土師器	椀	(12.5)	4.4	5.8	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
31	第	SP195	黒色土器	椀	(17.4)	3.8残	－	やや軟質	黒色	にぶい黄橙色	回転ナデ後ミガキ	回転ナデ
32	第	SP391	土製品	土製円盤	径 1.9	厚 0.7	－	やや軟質	－	灰白色	－	ナデ
33	第	SP244	須恵器	杯	－	4.1残	(6.6)	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、板目圧痕
34	第	SP361	白磁	椀	－	3.6残	－	硬質	胎土：灰白色	釉：灰白色	回転ナデ	回転ナデ
35	第	SP218	白磁	椀	－	2.4残	－	硬質	胎土：灰白色	釉：灰白色	回転ナデ	回転ナデ、縦櫛花弁文
36	第	SP185	青磁	椀	(17.0)	6.0	(8.0)	硬質	胎土：灰白色	釉：浅黄色	回転ナデ	回転ナデ、ヨコナデ
37	第	SP257(SI88)	須恵器	長頸壺	－	7.1残	－	硬質	明青灰色	明青灰色	回転ナデ	回転ナデ
38	第	SP427	土師器	甕	(21.6)	5.0残	－	やや軟質	灰白色	橙色	回転ナデ	回転ナデ
39	第	SP201	土師質土器	鍋	(24.4)	6.8残	－	硬質	にぶい黄橙色	浅黄橙色	ヨコナデ、ヨコハケ	ヨコナデ、オサエ、平行ナデ
40	第	SP109	土製品	棒状土錘	径 1.1	長 5.9	孔径 0.5	やや軟質	－	灰白色	－	ナデ
41	第	SP306	土製品	土錘	径 1.7	長 5.4	孔径 0.5	やや軟質	－	灰白色	芯材抜き取り	ナデ
42	第	SK3	土師器	甕	－	4.3残	－	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ
43	第	SK7	土師器	杯	－	1.8残	4.6	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラ切り
44	第	SK7	土師器	杯	－	1.6残	5.0	やや軟質	淡赤橙色	淡赤橙色	回転ナデ	回転ナデ、赤切り後ナデ
45	第	SK7	土師器	椀	－	1.9残	(7.0)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
46	第	SK7	土師器	椀	－	2.1残	6.0	やや軟質	灰黄褐色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、ナデ
47	第	SK7	黒色土器	椀	－	1.7残	7.2	やや軟質	褐灰色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
48	第	SK11	土師器	杯	－	4.1残	7.2	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ、ナデ
49	第	SK10	土師器	皿	(7.2)	0.8	6.0	やや軟質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
50	第	SK10	土師器	杯	－	0.8残	4.7	やや軟質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
51	第	SK10	土師器	杯	－	1.5残	4.9	やや軟質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
52	第	SK10	土師器	杯	(13.2)	3.4残	－	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ
53	第	SK10	土師器	杯	(13.0)	3.1残	－	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ
54	第	SK10	土師質土器	足鍋	－	9.2残	－	やや軟質	灰白色	灰白色	ハケ後ナデ、ナデ	ナデ

番号	地区	遺構	器種	器形	法量（cm）			焼成	色調		調整	
					口径	器高	底径		内面	外面	内面	外面
55	XIII	SK10	土師質土器	足鍋	(25.2)	8.7 残	−	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコハケ	タテハケ後ナデ
56	XIII	SK10	瓦質土器	足鍋	(21.6)	10.9	−	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ、ヨコハケ	ハケ後ナデ、格子目タタキ
57	XIII	ST1	土師器	皿	10.3	2.0	4.5	やや軟質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
58	XIII	ST1	土師器	皿	10.2	1.9	6.5	やや軟質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ、糸切り、焼成後底部穿孔
59	XIII	ST1	土師器	杯	12.9	4.0	5.0	やや軟質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
63	XIII	SD3	青磁	椀	−	3.4 残	−	硬質	胎土：灰白色	釉：緑灰色	回転ナデ	回転ナデ、鎬蓮弁文
64	XIII	SD3	須恵器	杯	−	2.5 残	6.0	硬質	明青灰色	明青灰色	回転ナデ、ヨコナデ	回転ナデ、板目圧痕
65	XIII	SD5	瓦質土器	甕	−	6.5 残	−	やや軟質	灰白色	灰白色	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、格子目タタキ
66	XIII	SD6	土師器	皿	(7.2)	1.1	(6.0)	やや軟質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
67	XIII	SD6	瓦質土器	足鍋	(28.2)	10.3 残	−	やや軟質	灰白色	褐灰色	ヨコハケ後タテハケ	タテハケ後ヨコナデ、平行タタキ
68	XIII	SE1	土師器	杯	9.4	2.0	4.7	やや軟質	淡橙色	淡橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
69	XIII	SE1	土師器	杯	−	1.4 残	(7.0)	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
70	XIII	SE1	土師器	杯	−	1.1 残	4.5	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
71	XIII	SE1	土師器	杯	−	1.4 残	(5.6)	やや軟質	にぶい黄橙色	灰黄褐色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
72	XIII	SE1	土師器	椀	−	3.2 残	(5.0)	軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ
73	XIII	SE1	土師器	椀	15.6	6.2	6.2	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ後ミガキ	回転ナデ、板目圧痕
74	XIII	SE1	土師器	椀	15.8	6.3	6.6	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ後ミガキ、ヘラ描き文	回転ナデ、板目圧痕
75	XIII	SE1	須恵器	甕	−	6.2 残	−	硬質	青灰色	青灰色	タタキ後ナデ	平行タタキ
76	XIII	SE1	土師器	杯	(14.9)	2.2 残	−	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
77	XIII	SE1	瓦	丸瓦	厚 1.9	8.5 残	−	やや軟質	にぶい褐色	にぶい黄橙色	ヨコナデ	平行タタキ
78	XIII	SE2	土師器	皿	12.9	2.5	6.0	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、板目後ナデ
79	XIII	SE2	土師質土器	脚付皿	−	1.9 残	(8.6)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り、オサエ
80	XIII	SE2	土師器	杯	−	1.0 残	4.7	軟質	明黄褐色	明黄褐色	回転ナデ後オサエ	回転ナデ、回転糸切り
81	XIII	SE2	瓦質土器	足鍋(脚)	−	9.1 残	−	やや軟質	−	灰白色	−	オサエ
82	XIII	SX3	土師器	杯	−	1.9 残	(7.4)	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	磨滅	磨滅
83	XIII	SX6	土師器	杯	11.7	3.0	5.5	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
84	XIII	SX6	土師器	杯	(11.4)	3.0	(5.3)	やや軟質	にぶい黄橙色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
85	XIII	SX6	土師器	椀	(13.0)	4.8	6.2	やや軟質	灰白色	褐灰色	回転ナデ後ナデ	回転ナデ、ヨコナデ
86	XIII	SX6	黒色土器	椀	−	3.3 残	8.7	やや軟質	灰白色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ
87	XIII	SX6	緑釉陶器	椀	−	1.8 残	5.7	硬質	胎土：褐灰色	釉：黄緑色	回転ナデ	回転ナデ、櫛目文
88	XIII	SX6	瓦質土器	鉢	−	3.3 残	(10.6)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
89	XIII	SX6	黒色土器	椀	14.8	6.0	8.2	やや軟質	黒褐色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
90	XIII	SX6	黒色土器	椀	−	5.8 残	8.3	やや軟質	褐灰色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
91	XIII	SX7	土師器	皿	7.5	0.9	6.2	やや軟質	黄橙色	黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
92	XIII	SX7	土師器	皿	(7.3)	0.9	(5.7)	やや軟質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
93	XIII	SX7	土師器	皿	6.8	1.2	7.0	やや軟質	黄橙色	黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、糸切り、板目
94	XIII	SX7	土師器	皿	7.6	1.0	6.4	やや軟質	黄橙色	黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、糸切り、板目
95	XIII	SX7	土師器	杯	14.3	5.1	6.3	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
96	XIII	SX5	土師質土器	足鍋	(23.6)	15.2 残	−	やや軟質	黄灰色	橙色	ヨコナデ、粗いハケ目	ナデ、格子目タタキ
99	XV	SB18(SP666)	土師器	皿	7.8	1.2	5.4	やや軟質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ、板目圧痕
100	XV	SB22(SP701)	土師器	杯	(11.8)	2.4	(6.0)	やや軟質	黄灰色	黄灰色	回転ナデ	回転ナデ、糸切り後ナデ
101	XV	SB22(SP699)	瓦質土器	擂鉢	(29.4)	4.7 残	−	やや軟質	暗灰色	暗灰色	剥落	ヨコナデ
102	XV	SB23(SP709)	土師器	杯	−	1.6 残	6.0	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
103	XV	SB24(SP716)	土師器	杯	(12.3)	2.4	(6.2)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
104	XV	SB24(SP715)	瓦質土器	鍋	−	5.7 残	−	硬質	灰色	灰色	ナデ	ナデ
105	XV	SB25(SP814)	青磁	皿	−	3.8 残	(14.2)	硬質	胎土：灰白色	釉：オリーブ灰色	回転ナデ、蓮弁	回転ナデ
106	XV	SB25(SP818)	土師質土器	鉢？	−	2.4 残	(8.4)	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、ケズリ
108	XV	SB27(SP831)	土師器	甕	(28.5)	4.6 残	−	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
109	XV	SB31(SP777)	土師器	杯	(9.0)	2.5	5.1	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
110	XV	SP603	土師器	皿	5.5	0.9	4.6	やや軟質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
111	XV	SP554	土師器	皿	6.6	1.5	4.2	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ後ナデ	回転ナデ
112	XV	SP462	土師器	杯	(8.5)	1.5	(4.4)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
113	XV	SP603	土師器	杯	(7.9)	1.5	3.3	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
114	XV	SP602	土師器	杯	−	1.5 残	(4.6)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り

番号	地区	遺構	器種	器形	法量（cm）			成成	色調		調整	
					口径	器高	底径		内面	外面	内面	外面
115	Ⅺ	SP571	土師器	杯	－	1.9残	5.0	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ後ナデ	回転ナデ、赤切り後指目、ナデ
116	Ⅺ	SP771	土師器	杯	(13.2)	2.2	6.0	やや軟質	暗灰色	にぶい黄橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、板目後ナデ
117	Ⅺ	SP676	土師器	杯	(12.8)	2.8	4.5	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ後ナデ	回転ナデ、回転糸切り
118	Ⅺ	SP788	土師器	杯	(12.8)	3.1	(5.6)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ後ナデ	回転ナデ後ナデ、板目後ナデ
119	Ⅺ	SP470	土師器	椀	(15.6)	5.1	(6.6)	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ
120	Ⅺ	SP729	土師器	椀	－	4.2残	6.4	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、ヨコナデ
121	Ⅺ	SP492	土師器	椀	(13.4)	3.0残	－	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ
122	Ⅺ	SP496	土師器	椀	－	3.4残	(7.4)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ後ナデ、オサエ	回転ナデ後ナデ、ヨコナデ
123	Ⅺ	SP849	土師器	椀	－	1.6残	6.0	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、ヨコナデ
124	Ⅺ	SP849	土師器	椀	－	3.2残	(6.3)	やや軟質	灰黄褐色	にぶい黄橙色	回転ナデ後オサエ	回転ナデ、板目圧痕
125	Ⅺ	SP613	土師器	鉢	9.0	5.6	－	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ、オサエ	オサエ
126	Ⅺ	SP1108	土師器	甕	(12.7)	6.0残	－	やや軟質	淡赤橙色	にぶい橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、タテハケ
127	Ⅺ	SP519	白磁	椀	－	2.3残	－	硬質	胎土：灰白色	釉：灰白色	回転ナデ	回転ナデ
128	Ⅺ	SP706	瓦質土器	擂鉢	－	3.9残	－	やや軟質	灰白色	黒褐色	調基、擂目	ヨコナデ、オサエ
129	Ⅺ	SP603	瓦質土器	鍋	(26.6)	4.6残	－	やや軟質	暗灰色	暗灰色	ヨコナデ	ヨコナデ、タタキ
130	Ⅺ	SP544	瓦質土器	甕	－	6.3残	－	やや軟質	暗灰色	暗灰色	ヨコナデ	ナデ、格子目タタキ
131	Ⅺ	SP574	瓦質土器	鉢	(41.0)	11.8残	－	やや軟質	黄灰色	黄灰色	ヨコハケ後ナデ	ヨコナデ、ナデ
132	Ⅺ	SP736	瓦質土器	足鍋（脚）	－	13.6残	－	やや軟質	－	灰白色	－	オサエ
133	Ⅺ	SP736	土師質土器	足鍋（脚）	－	13.6残	－	やや軟質	－	灰白色	－	オサエ
134	Ⅺ	SP565	瓦質土器	鍋	(19.8)	6.3残	－	やや軟質	暗灰色	暗灰色	ヨコナデ	調基
135	Ⅺ	SK17	土師器	皿	8.6	1.7	5.3	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
136	Ⅺ	SK21	土師器	杯？	(6.8)	2.7	(5.4)	やや軟質	灰白色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ、赤切り後ナデ
137	Ⅺ	SK22	土師器	杯	(14.0)	3.1	(8.0)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
138	Ⅺ	SK22	瓦質土器	鉢	(20.0)	4.6残	－	やや軟質	黒褐色	黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ
139	Ⅺ	SE5	土師器	皿	(10.6)	1.8	(6.2)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転糸切り
140	Ⅺ	SE5	瓦質土器	擂鉢	－	3.7残	－	硬質	灰色	灰色	ヨコナデ、擂目	ナデ、オサエ
141	Ⅺ	SD10	青磁	皿	(10.0)	2.1	(3.8)	硬質	胎土：灰白色 釉：オリーブ色		回転ナデ	回転ナデ
142	Ⅺ	SD11	瓦質土器	足鍋	(18.4)	11.2残	－	やや軟質	灰白色	黒色	ヨコナデ、ヨコハケ	ハケ後ナデ
143	Ⅺ	SX10	土師器	杯	(11.5)	3.0	5.4	軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ後ヨコナデ、ナデ	回転ナデ、板目圧痕
144	Ⅺ	SX10	土師器	杯	(12.8)	3.8	(7.0)	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切ナデ、板目
145	Ⅺ	SX10	土師器	杯	(12.4)	4.0	(4.9)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
146	Ⅺ	SX10	土師器	杯	(12.8)	4.5	(8.6)	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラ切り
147	Ⅺ	SX10	土師器	杯	(12.8)	3.6	(7.0)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラ切り
148	Ⅺ	SX10	土師器	杯	－	1.3残	(8.0)	軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラ切り
149	Ⅺ	SX10	土師器	杯	－	3.4残	(7.2)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラ切り
150	Ⅺ	SX10	土師器	杯	－	2.3残	6.9	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切ナデ、板目
151	Ⅺ	SX10	土師器	杯	－	2.1残	(9.6)	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切ナデ、板目
152	Ⅺ	SX10	土師器	椀	－	2.3残	(6.6)	やや軟質	橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切後ナデ
153	Ⅺ	SX10	土師器	椀	－	3.9残	7.4	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、ヨコナデ
154	Ⅺ	SX10	須恵器	杯蓋	14.1	2.3	－	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラケズリ
155	Ⅺ	SX10	須恵器	杯蓋	(14.8)	1.5残	－	硬質	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラケズリ
156	Ⅺ	SX10	須恵器	杯蓋	(15.6)	1.0	－	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラケズリ
157	Ⅺ	SX10	須恵器	杯蓋	(15.0)	1.8残	－	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
158	Ⅺ	SX10	須恵器	杯蓋	－	1.6残	－	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラケズリ
159	Ⅺ	SX10	須恵器	杯蓋	(10.9)	1.5	(5.4)	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラケズリ
160	Ⅺ	SX10	須恵器	杯	12.8	4.5	7.2	やや軟質	浅黄色	浅黄色	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラ切り
161	Ⅺ	SX10	須恵器	杯	13.2	3.5	8.0	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ヘラ切ナデ、板目
162	Ⅺ	SX10	須恵器	杯	12.8	3.7	7.3	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切後ナデ
163	Ⅺ	SX10	須恵器	杯	(12.6)	4.5	(4.2)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切後ナデ
164	Ⅺ	SX10	須恵器	杯	12.1	3.8	6.8	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ヘラ切後ナデ
165	Ⅺ	SX10	須恵器	杯	12.8	4.2	6.9	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ヘラ切ナデ、板目
166	Ⅺ	SX10	須恵器	杯	12.6	4.0	7.8	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ヘラ切後ナデ
167	Ⅺ	SX10	須恵器	杯	(16.0)	5.4	8.2	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ
168	Ⅺ	SX10	須恵器	杯	(14.8)	5.2	7.6	硬質	灰色	灰色	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ

番号	地区	遺構	器種	器形	法量（cm）			焼成	色調		調整	
					口径	器高	底径		内面	外面	内面	外面
169	Ⅺ	SX10	須恵器	杯	－	3.6 残	(7.0)	硬質	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ
170	Ⅺ	SX10	須恵器	杯	－	2.3 残	(7.4)	硬質	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ，ナデ
171	Ⅺ	SX10	須恵器	杯	－	2.9 残	(7.3)	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ，回転ヘラ切り
172	Ⅺ	SX10	須恵器	杯	－	4.7 残	(7.6)	硬質	灰白色	灰白色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ヘラ切後ナデ
173	Ⅺ	SX10	土師器	皿	(15.5)	2.1	(11.0)	やや軟質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ，ヘラ切後ナデ
174	Ⅺ	SX10	須恵器	皿	(14.2)	2.1	(8.2)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，回転ヘラ切り
175	Ⅺ	SX10	緑釉陶器	皿？	－	1.9 残	－	軟質	胎土：灰白色	釉：淡黄緑色	回転ナデ	回転ナデ
176	Ⅺ	SX10	緑釉陶器	椀？	－	6.1 残	－	やや軟質	胎土：灰白色	釉：明黄緑色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，回転ヘラケズリ
177	Ⅺ	SX10	緑釉陶器	椀？	－	1.6 残	(18.5)	やや軟質	胎土：灰白色	釉：明黄緑色	回転ナデ	回転ナデ，回転ヘラケズリ
178	Ⅺ	SX10	須恵器	甕	(16.6)	3.2 残	－	硬質	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ
179	Ⅺ	SX10	須恵器	甕	－	2.5 残	(15.0)	硬質	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ，ナデ
180	Ⅺ	SX10	須恵器	甕	－	9.3 残	－	硬質	灰色	灰色	同心円タタキ	平行タタキ
181	Ⅺ	SX10	土師器	甕	－	10.1 残	－	やや軟質	灰白色	橙色	ヨコナデ	ヨコナデ，ケテハケ
182	Ⅺ	SX10	土製品	土錘	径 1.6	長 5 4.1	孔径 0.5	硬質	－	灰白色	芯材抜き取り	ナデ
183	Ⅺ	SX10	土製品	埴輪	－	厚 3 (2.5)	－	やや軟質	灰白色	灰白色	布目	オサエ
184	Ⅺ	SX10	土製品	羽口	径 7.1	9.7 残	孔径 3.2	やや軟質	胎土：橙色	被熱部：灰色	芯材抜き取り	オサエ
185	Ⅺ	SX11	土製品	羽口	径 8.0	長 5 13.2	孔径 4.0	やや軟質	胎土：橙色	被熱部：灰色	芯材抜き取り，オサエ	オサエ，ナデ
190	Ⅺ	SB34(SP913)	青磁	椀	(14.2)	2.9 残	－	硬質	胎土：灰白色	釉：オリーブ灰色	回転ナデ	回転ナデ，蓮弁文
191	Ⅺ	SB35(SP921)	土師器	皿	(7.6)	1.2	4.4	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ，回転糸切り
192	Ⅺ	SB35(SP919)	土師器	杯	(10.8)	2.1	(5.0)	やや軟質	暗灰色	にぶい黄橙色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，板目圧痕
193	Ⅺ	SB35(SP945)	土師器	杯	(12.2)	2.8	(4.2)	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ，糸切り後板目
194	Ⅺ	SB35(SP921)	土師器	杯	(11.2)	3.0	(4.8)	やや軟質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ，ナデ
195	Ⅺ	SB35(SP918)	土師器	杯	(11.2)	3.2	4.4	やや軟質	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ，回転糸切り
196	Ⅺ	SB35(SP923)	土師器	杯	(11.4)	2.5	(4.0)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ，糸切り後板目
197	Ⅺ	SB35(SP917)	土師器	杯	－	1.7 残	5.0	硬質	灰黄褐色	灰黄褐色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，板目圧痕
198	Ⅺ	SB35(SP919)	土師器	皿	－	0.5 残	(4.6)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，糸切り後板目
199	Ⅺ	SB35(SP947)	青磁	椀	(18.4)	7.8	6.2	硬質	胎土：灰白色	釉：黒オリーブ色	回転ナデ，花文	回転ナデ，蓮弁文，雷文
200	Ⅺ	SB35(SP919)	瓦質土器	足鍋	－	5.3 残	－	やや軟質	灰白色	灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ
201	Ⅺ	SB35(SP919)	土師質土器	足鍋(脚)	－	7.9 残	－	やや軟質	－	灰白色	－	オサエ
202	Ⅺ	SB35(SP917)	土師器	甕	(31.8)	21.3 残	－	やや軟質	灰白色	黒褐色	ヨコナデ，ヘラトスリ，タタキ	ヨコナデ，タタキ
203	Ⅺ	SB36(SP974)	土師器	杯	－	2.2 残	(5.2)	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，糸切り後ナデ，板目
204	Ⅺ	SB36(SP974)	瓦質土器	鉢？	(24.6)	5.0	(18.6)	硬質	暗灰色	暗灰色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ナデ，オサエ
205	Ⅺ	SP939	土師器	皿	(9.0)	2.4	(5.0)	軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ，回転糸切り
206	Ⅺ	SP875	土師器	皿	(7.8)	1.6	(4.2)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ナデ
207	Ⅺ	SP875	土師器	杯	－	1.4 残	(4.5)	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ，回転糸切り
208	Ⅺ	SP895	土師器	杯	12.0	2.5	5.5	硬質	灰黄褐色	灰黄褐色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，回転糸切り
209	Ⅺ	SP890	土師器	杯	(10.7)	2.8	(5.4)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，ナデ，板目
210	Ⅺ	SP980	土師器	杯	(13.8)	3.8	(5.0)	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ	回転ナデ，回転糸切り
211	Ⅺ	SP976	土師器	柱状高台杯	－	2.6 残	4.6	やや軟質	橙色	橙色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，回転糸切り
212	Ⅺ	SP982	土師器	椀	－	2.1 残	6.4	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	回転ナデ，ミガキナデ	回転ナデ，ヘラ切り後ナデ
213	Ⅺ	SK25	土師器	杯	(12.0)	3.0	5.0	やや軟質	橙色	灰黄褐色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，糸切り後板目
214	Ⅺ	SD23	土師器	杯	(13.8)	2.0	(7.6)	やや軟質	橙色	灰白色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，板目圧痕
215	Ⅺ	SD23	青磁	椀	(15.0)	4.7 残	－	硬質	胎土：灰白色	釉：明青灰色	回転ナデ	回転ナデ
216	Ⅺ	SE6	土師器	皿	11.2	2.1	5.2	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，糸切り後ナデ
217	Ⅺ	SE6	土師器	皿	(11.2)	2.3	4.8	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，糸切り後ナデ
218	Ⅺ	SE6	土師器	皿	11.1	2.1	4.6	やや軟質	灰白色	灰白色	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，糸切り後板目
219	Ⅺ	SE6	土師質土器	足鍋	－	7.3 残	－	やや軟質	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ	ナデ
220	Ⅺ	SE6	瓦質土器	擂鉢	(29.8)	7.3 残	－	やや軟質	灰色	暗灰色	ヨコナデ，ヨコハケ，ナデ，6条擂目	ヨコナデ，オサエ
221	Ⅺ	SE6	瓦質土器	擂鉢	－	3.1 残	(12.0)	やや軟質	灰色	灰色	ナデ，6条擂目	ナデ，オサエ，板目圧痕
222	Ⅺ	SE6	瓦質土器	甕	(49.6)	8.6 残	－	やや軟質	暗灰色	暗灰色	調査	ヨコナデ
223	Ⅺ	SE6	瓦質土器	焙烙？	(30.2)	3.4	(15.6)	やや軟質	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ，オサエ
224	Ⅺ	SE6	青磁	椀	－	3.4 残	(9.2)	硬質	胎土：灰白色	釉：灰オリーブ色	回転ナデ	回転ナデ

Ⅳ　まとめ

今回実施した東禅寺・黒山遺跡の発掘調査では、主に古代（平安時代後期）・中世（室町時代）の遺構・遺物が確認された。遺構の中心となるのは掘立柱建物であり、そのほかに井戸、土坑、墓などが検出され、古代・中世の集落構造を知るうえでいくつかの成果が得られた。最後にこうした調査成果についてまとめ、今後の課題について述べておきたい。

古代（平安時代後期）の掘立柱建物はⅩⅣ地区で多く検出されており、特にその南西部で集中的に構築されている。その中でもSB７、SB10と命名した掘立柱建物は、床面積50㎡を超える規模を誇り、各柱穴の間隔は約2.4mで規則性が高い。これらの建物は、その出土遺物から10世紀代を中心とする時期の所産と考えられ、この年代は、周防鋳銭司の操業時期と符号する。よって両者の間に何らかの関連を想定することが可能であり、SB７から出土した香炉などから、官人層の居宅であった可能性も浮上してくる。遺構に伴うものではないがⅩⅣ地区では石鈴が出土しており、上記の想定を補強する材料となろう。

過去の調査においても、ⅩⅣ地区に北接するⅥ地区で、平安時代後期の建物群が多く検出されており、金毛川に近い遺跡の西端部で、当該期の掘立柱建物が密集して構築されていた可能性が高くなったといえるだろう。周防鋳銭司の史跡指定地に近いエリアにこうした建物群が存在することは興味深いが、周防鋳銭司の比定地には異論もあり（大林：2003）、慎重な評価が必要である。このほかに注目されるのはST１とした土坑墓の検出で、土師器杯、皿とともに延喜通寶、棒状の金銅製品が確認された。出土土器から判断して10世紀後半代のものと推定されるが、推定頭位方向が南東であることや、１基のみの検出であることなど、特異な状況をどのように解釈すべきか、類例の増加を待って再検討したい。また、削平により全形を窺うことはできないが、SX７とした遺構から土師器皿・杯がまとまった状態で出土しており、墓もしくは地鎮に関連するような遺構の可能性がある。

ⅩⅤ地区の掘立柱建物は、建物の長軸方向を南北に意識するものと、東西に意識するものの二者があるものの、出土遺物からいずれも中世後半期の所産と考えられる。ただ、SB22は、片廂が付き、床束構造と考えられることや、規模や各柱穴の大きさが他の建物を上回っていることから、有力者層の居住建物であった可能性がある。またSB25も各柱穴の大きさや、根石の残存率が高い点など、しっかりとした構造を窺わせる。このSB25の柱穴からは永楽通寶が出土しており、建物の年代を15世紀初頭以降に求めることが可能である。

さらにⅩⅤ地区ではSX10とした不整形の廃棄土坑も注目される。出土した土師器、須恵器は、その型式学的特徴から９世紀後半から10世紀前半頃までのものと考えられ、量的にまとまった資料であると言える。また、羽口や炉壁の出土は近辺で鋳造が行われていたことを示唆する。過去の調査では、西接するⅧ地区で溶解炉や火床炉の可能性が指摘される遺構が検出されており、本遺構の年代とも近い。集落内で小規模ながら、鋳造活動が行われていたことが窺える。

ⅩⅥ地区は、調査面積も小さく、遺構の密集区も限定されているが、比較的小規模な掘立柱建物が２棟併存し、納屋のような建物と井戸という組み合わせが想定され、中世後期における集落の基本構成を窺ううえで貴重な事例といえる。また、中世墨書土師器皿の出土は、過去６次に及ぶ当該地区の調

査では見られなかったものであり、用途の問題などを含め注目される成果である。

また、遺構に伴うものではないが、縄文時代草創期の遺物である有舌尖頭器が出土したことも大きな成果として挙げられよう。当遺跡の周辺では、高橋慎二氏によって有舌尖頭器が採集されており(小南:2000)、今回の出土で２例目となる。県内で１遺跡２例以上有舌尖頭器が出土した事例はなく、この地が人々の活動の舞台として古くから利用されていたことが窺える。ただ、現状では当該期の土器や遺構が未だ確認できていないことから、居住区域というよりも狩猟スペースとしての空間であったと評価しておきたい。

東禅寺・黒山遺跡は今後も発掘調査が予定されているが、今年度の調査で、開発事業計画地内の全体的な状況がほぼ把握できるようになってきた。今後は過去に実施された調査区の成果を検討し、掘立柱建物の再構成や、出土遺物群の編年作業等を実施していく必要がある。こうした作業を通じて、周防鋳銭司との関連や、中世後半段階における村落構成のありかたなど、当遺跡がもつ意義を明らかにすることができるだろう。

参考文献

大林達夫　2003「周防鋳銭司の所在地について」『山口県地方史研究』90

小南裕一　2000「山口県における縄文時代開始期前後の石器群」『九州旧石器』４

奈良文化財研究所　2003『古代の官衙遺跡　Ⅰ遺構編』

山口市教育委員会　1978『周防鋳銭司跡』

山口市　2012『山口市史　史料編考古・古代』

付編

東禅寺・黒山遺跡出土金属製品の分析

財団法人元興寺文化財研究所　山田卓司

1．分析対象

東禅寺・黒山遺跡出土の金属製品（古代銭・棒状銅製品・スラグ等）（図１、２、３）

2．分析内容

蛍光X線分析を用いて金属製品の定性成分分析を行った。

3．使用機器

エネルギー分散型蛍光X線分析（XRF）装置【SIIナノテクノロジー SEA5230】

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のX線（蛍光X線）を検出することにより元素を同定する。測定は、大気圧下でφ1.8 mm径のコリメータを用い、45 kVの管電圧で180秒間行った。No.１の測定箇所１-２のみφ0.1 mm径のコリメータを用い、50 kVの管電圧で180秒間行った。なお、X線管球はモリブデン（Mo）である。

4．結果と考察

4－1．古代銭

古代銭のXRF結果より、表面では鉄(Fe)、銅(Cu)、ヒ素(As)、銀(Ag)、鉛(Pb)、ビスマス(Bi)を、破断面（測定箇所１-２）では鉄、銅、ヒ素、ビスマスを検出した（表１、図４）。これら３点の古代銭は、銅製品であったと考えられる。

4－2．棒状銅製品

棒状銅製品のXRF結果より、金色部分では鉄、銅、銀、金、水銀、鉛を、（暗）緑色部分では鉄、銅、ヒ素、銀、金、鉛を検出した（表２、図５）。（暗）緑色部分と比較して金色部分で銀、金と水銀を強く検出するため、これら４点の棒状銅製品は金銅製品であったと考えられる。

4－3．スラグ等

スラグ等のXRF結果より、No.８-１とNo.８-２では鉄と銅と鉛が強く検出され、No.８-３では炉壁に付着する緑色部分（８-３-a）で銅を強く検出した（表３、図６）。これら3点のスラグ等は原料精製時の銅滓や炉であった可能性が考えられる。

図１　古代銭のXRF測定箇所（左上図：No. 1、右上図：No. 2、下図：No. 3表裏）

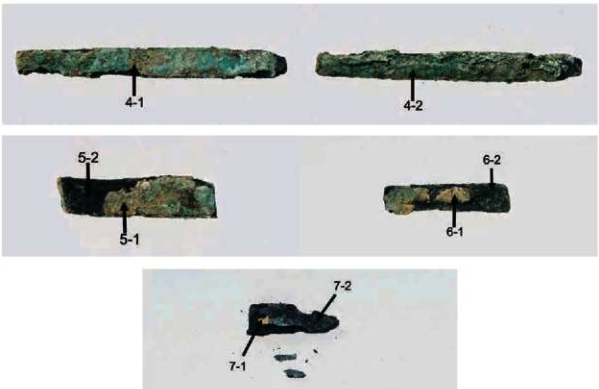


図２　棒状銅製品のXRF測定箇所（上から：No. ４表裏、No. 5・No. 6、No. 7）

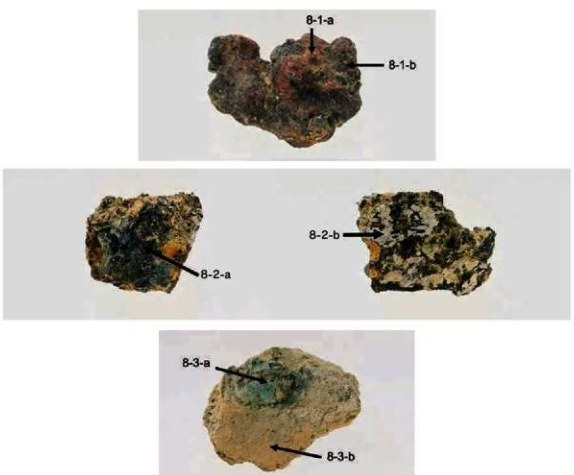


図３　スラグ等の分析箇所（上から：No. 8-1スラグ、No. 8-2スラグ表裏、No. 8-3炉壁）

表１　古代銭のXRF結果まとめ

Z	元素	元素名	ライン	No. 1-1 (cps)	No. 1-2 (cps)	No. 2-1 (cps)	No. 3-1 (cps)	No. 3-2 (cps)	ＲＯＩ (keV)
26	Fe	鉄	K α	208.5	6.470	45.419	51.69	45.23	6.23- 6.57
29	Cu	銅	K α	2101	460.2	1509	134.7	1991	7.86- 8.22
33	As	ヒ素	K β	13.35	0.744	73.80	92.06	28.24	11.52-11.93
47	Ag	銀	K α	–	–	–	5.718	–	21.84-22.36
82	Pb	鉛	L β	185.0	–	449.2	873.9	318.5	12.42-12.84
83	Bi	ビスマス	L β	30.05	3.884	–	–	–	12.81-13.24

表２-１　棒状銅製品のXRF結果まとめ１

Z	元素	元素名	ライン	No. 4-1 (cps)	No. 4-2 (cps)	No. 5-1 (cps)	No. 5-2 (cps)	ＲＯＩ (keV)
26	Fe	鉄	K α	66.38	53.80	41.78	25.33	6.23- 6.57
29	Cu	銅	K α	1574	2662	558.4	2340	7.86- 8.22
33	As	ヒ素	K β	–	8.715	–	–	11.52-11.93
47	Ag	銀	K α	29.71	–	38.14	25.62	21.84-22.36
79	Au	金	L β	295.6	–	601.6	41.86	11.28-11.68
80	Hg	水銀	L β	75.53	–	184.5	–	11.65-12.06
82	Pb	鉛	L β	38.67	36.25	174.9	8.957	12.42-12.84

表２-２　棒状銅製品のXRF結果まとめ２

Z	元素	元素名	ライン	No. 6-1 (cps)	No. 6-2 (cps)	No. 7-1 (cps)	No. 7-2 (cps)	ＲＯＩ (keV)
26	Fe	鉄	K α	69.58	39.95	25.33	25.50	6.23- 6.57
29	Cu	銅	K α	1080	2170	2010	2314	7.86- 8.22
33	As	ヒ素	K β	–	–	–	–	11.52-11.93
47	Ag	銀	K α	75.72	20.97	42.56	38.02	21.84-22.36
79	Au	金	L β	425.6	32.28	252.2	44.80	11.28-11.68
80	Hg	水銀	L β	160.3	–	54.09	–	11.65-12.06
82	Pb	鉛	L β	56.07	7.706	32.41	39.76	12.42-12.84

表３　スラグ等のXRF結果まとめ

Z	元素	元素名	ライン	No. 8-1 -a (cps)	No. 8-1 -b (cps)	No. 8-2 -a (cps)	No. 8-2 -b (cps)	No. 8-3 -a (cps)	No. 8-3 -b (cps)	ＲＯＩ (keV)
20	Ca	カルシウム	K α	87.19	149.0	30.81	9.195	–	16.34	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	16.63	17.18	7.781	19.83	–	32.98	4.35- 4.66
25	Mn	マンガン	K α	47.67	88.98	23.98	10.88	–	35.83	5.73- 6.06
26	Fe	鉄	K α	303.2	872.9	265.1	430.0	15.18	590.7	6.23- 6.57
29	Cu	銅	K α	406.2	251.3	432.3	179.0	2005	142.6	7.86- 8.22
33	As	ヒ素	K β	–	–	–	–	–	40.15	11.52-11.93
38	Sr	ｽﾄﾛﾝﾁｳﾑ	K α	37.16	54.38	18.80	23.71	–	36.29	13.92-14.36
82	Pb	鉛	L β	245.5	260.2	740.7	698.1	334.1	121.7	12.42-12.84

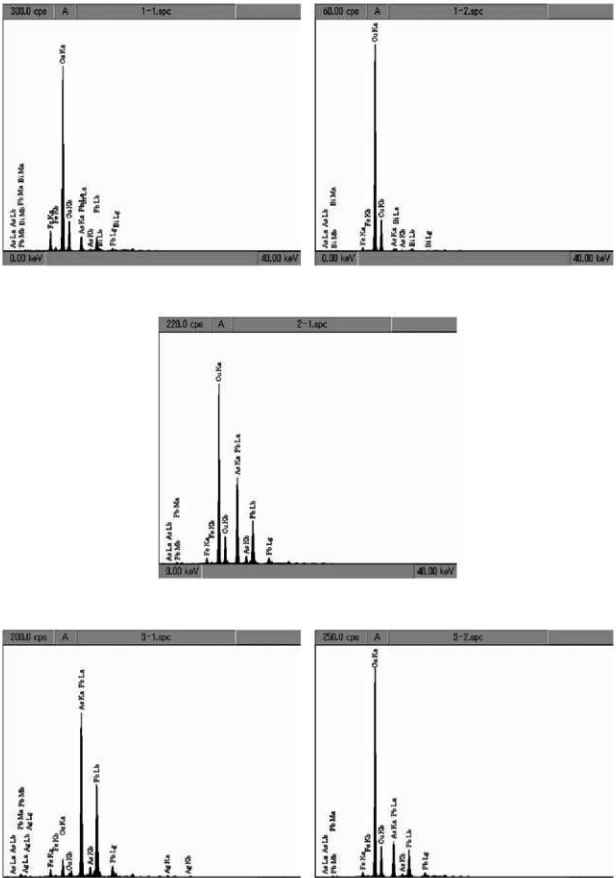


図4　古代銭のXRFスペクトル（左上図：No. 1-1表面、右上図：No. 1-2破断面、
中図：No. 2-1表面、左下図：No. 3-1黒色部分、右下図：No. 3-2緑色部分）

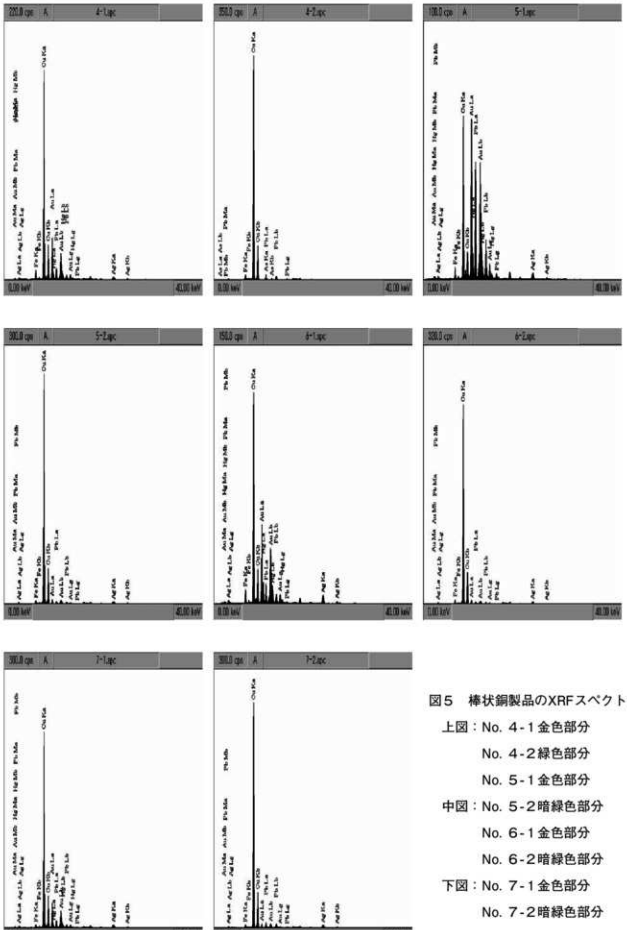


図５　棒状銅製品のXRFスペクトル

上図：No. ４-１金色部分

No. ４-２緑色部分

No. ５-１金色部分

中図：No. ５-２暗緑色部分

No. ６-１金色部分

No. ６-２暗緑色部分

下図：No. ７-１金色部分

No. ７-２暗緑色部分

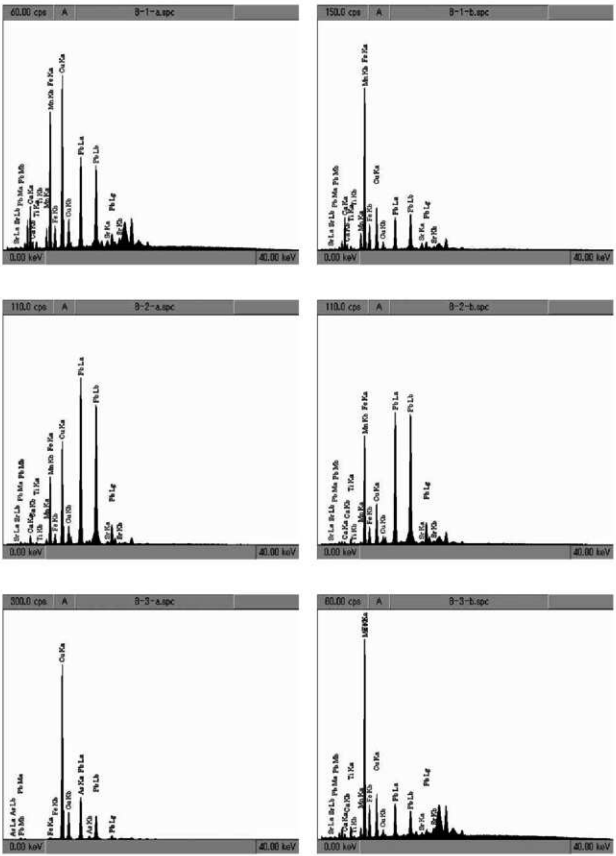


図6　スラグ等のXRFスペクトル（左上図：No. 8-1-a赤色部分、右上図：No. 8-1-b黒色部分、左中図：No. 8-2-a黒色部分、右中図：No. 8-2-b白色部分、左下図：No. 8-3-a緑色部分、右下図：No. 8-3-b褐色部分）

図　版

調査区遠景（西から）

図版 2

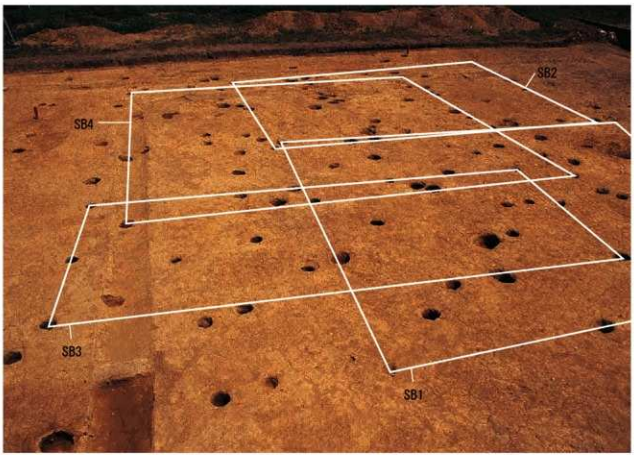
調査区全景

XIV地区全景

図版 4

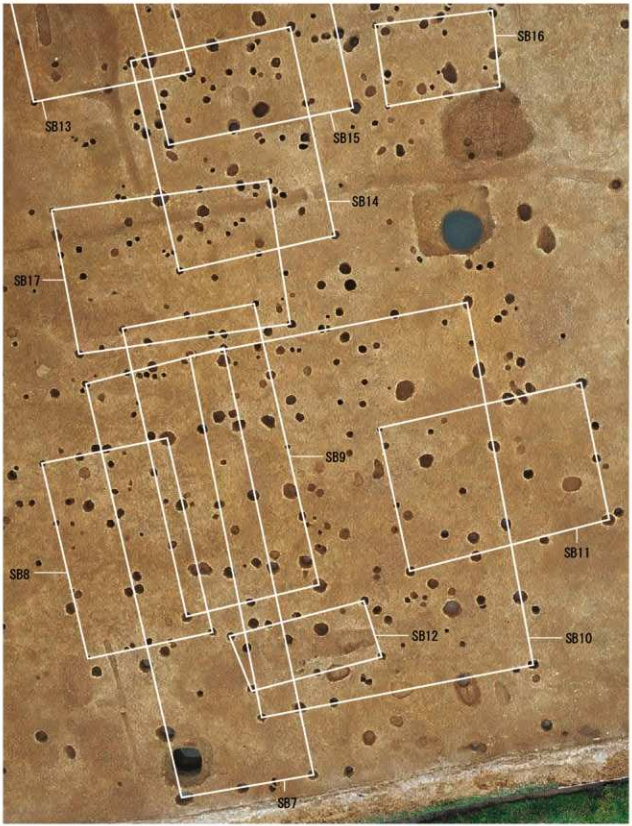
XV地区全景

Ⅻ地区全景

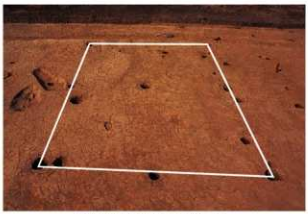


ⅩⅣ地区北東部掘立柱建物群（南から）

図版 6

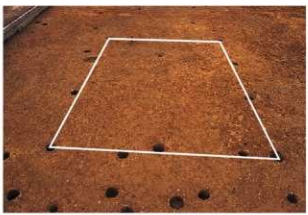


Ⅻ地区南西部掘立柱建物群

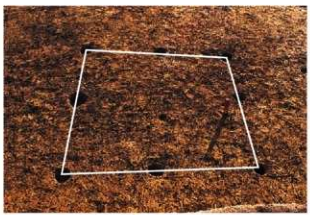


SB6 完掘状況（南西から）

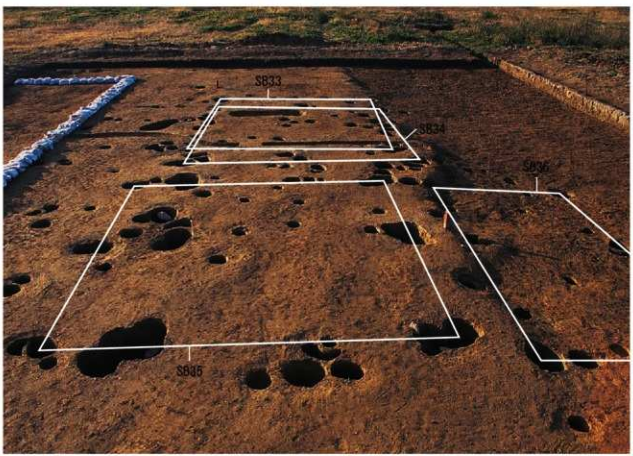
SB25 完掘状況（南東から）



SB27 完掘状況（南西から）



SB37 完掘状況（北東から）



Ⅻ地区西半部掘立柱建物群（東から）

図版 8

SP109 遺物出土状況（西から）

SP397 遺物出土状況（南から）

SP428 礫出土状況（西から）

SP470 遺物出土状況（東から）

SP574 遺物出土状況（南から）

SP613 遺物出土状況（東から）

SP729 遺物出土状況（北から）

SP797 遺物出土状況（南から）

SK2 土層断面（南から）

SK7 遺物出土状況（西から）

図版 10

SK10 上部遺物出土状況（南から）

SK17 遺物出土状況（北から）

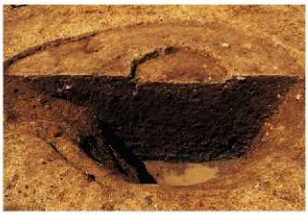
SK21 礫出土状況（南から）

SK22 土層断面（南から）

ST1 遺物出土状況①（西から）

ST1 遺物出土状況②（西から）

ST1 遺物出土状況③（西から）



SE1 土層断面（東から）

SE2 石組み検出状況（北から）

SE3 土層断面（北から）

SE3 完掘状況（北から）

SE4 完掘状況（北東から）

SE5 土層断面（北から）

SE5 完掘状況（北から）

SE6 土層断面（北から）

図版 12

SX1 土層断面（南東から）

SX5 遺物出土状況（西から）

SX6 土層断面（東から）

SX6 遺物出土状況①（東から）

図版 14

SX6 遺物出土状況②（南から）

SX6 遺物出土状況③（東から）

SX6 完掘状況（南から）

SX7 遺物出土状況①（南から）

SX7 遺物出土状況②（西から）

SX10 遺物出土状況①（東から）

SX10 遺物出土状況②（東から）

図版 16

SX10 遺物出土状況③（南から）

SX10 土層断面（西から）

SX10 完掘状況（東から）

出土遺物（1）

図版 18

出土遺物（2）

出土遺物（3）

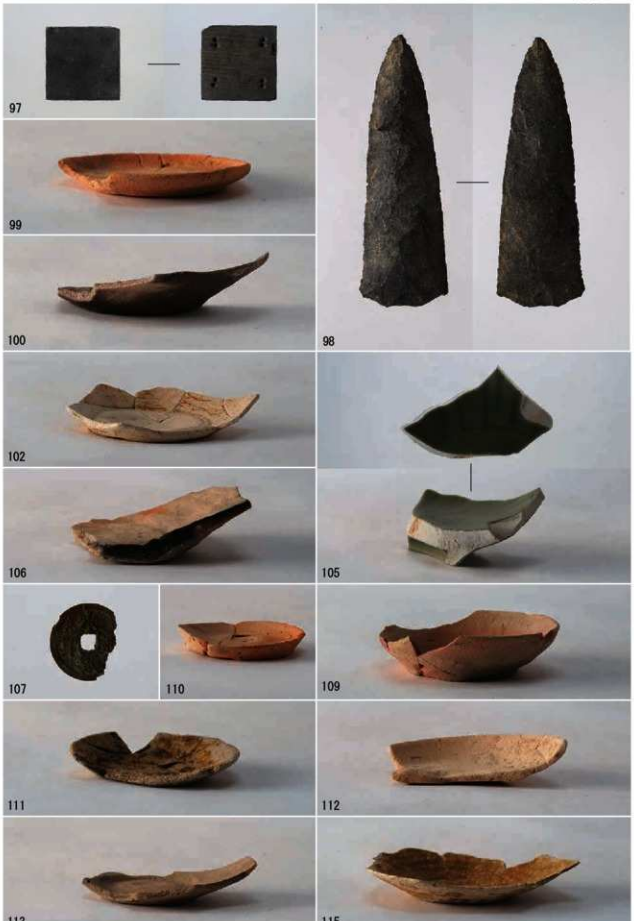
図版 20

出土遺物（4）

出土遺物（5）

図版 22

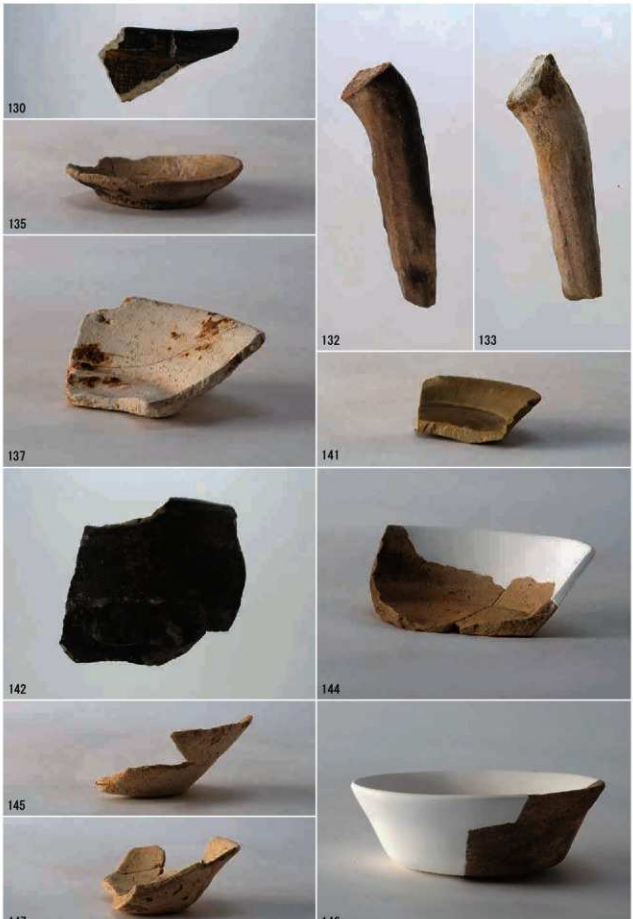
出土遺物（6）



出土遺物（7）

図版 24

出土遺物（8）



出土遺物（9）

図版 26

出土遺物（10）

出土遺物（11）

図版 28

出土遺物（12）

204

205

206

199

202

208

209

出土遺物（13）

図版 30

出土遺物（14）

報 告 書 抄 録

ふりがな	とうぜんじ・くろやまいせき7
書名	東禅寺・黒山遺跡Ⅶ
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第84集
編集著者名	小南裕一　高木英明　水津亜希子　大重優花
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL 083-923-1060
発行年月日	西暦2013年3月22日（平成25年3月22日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
とうぜんじ 東禅寺・ くろやまいせき 黒山遺跡Ⅶ	やまぐちけん 山口県 やまぐちし 山口市 すずがし 鋳銭司	35203		34° 5′ 2″	131° 26′ 51″	20120525 ～ 20121217	3,490	遊水池建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東禅寺・ 黒山遺跡Ⅶ	集落跡	古代 ～ 中世	掘立柱建物　37棟 溝状遺構　23条 井戸　6基 墓　1基 土坑　25基 柱穴　約1,900個	土師器 須恵器 土師質土器 瓦質土器 黒色土器 緑釉陶器 灰釉陶器 磁器 石器・石製品 土製品 金属製品	

要約	東禅寺・黒山遺跡は、主として古代から中世にかけて営まれた集落遺跡である。今回の発掘調査でも、隣接する周防鋳銭司の操業時期と符号する10世紀代を中心とする掘立柱建物が多数検出されたが、中でも床面積50㎡を超える2棟の大型建物は、その規模と出土遺物から官人の居宅であった可能性も指摘できる。また、土師器杯、皿、金銅製品とともに延喜通寶が副葬された土坑墓は、周防鋳銭司と何らかの関係があった人物の墓と想定できる。 さらに、今回の調査では縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土しており、周防鋳銭司設置以前の当地域を考えるうえで、貴重な資料を得たと言える。

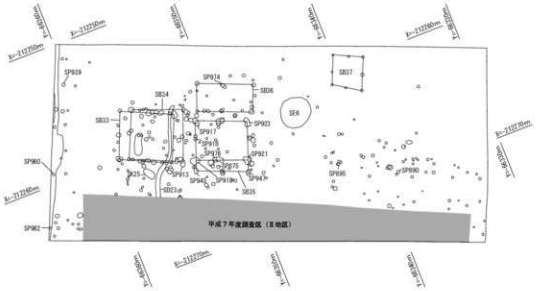
山口県埋蔵文化財センター調査報告　第84集

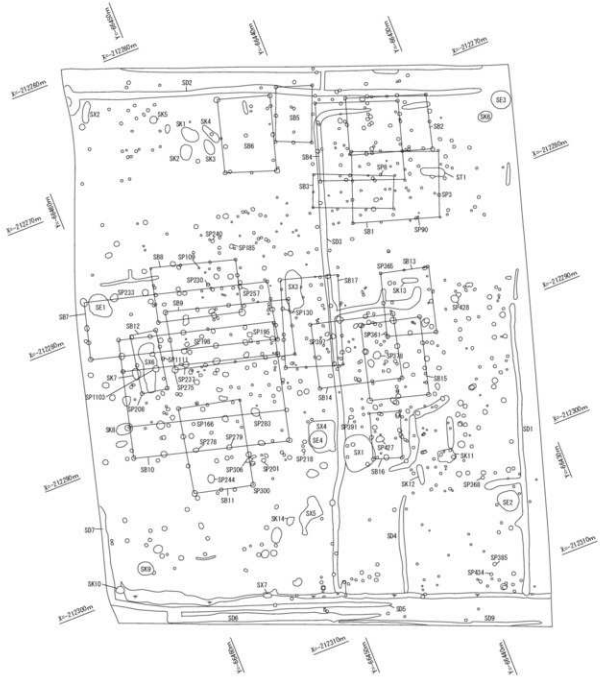
東禅寺・黒山遺跡Ⅶ

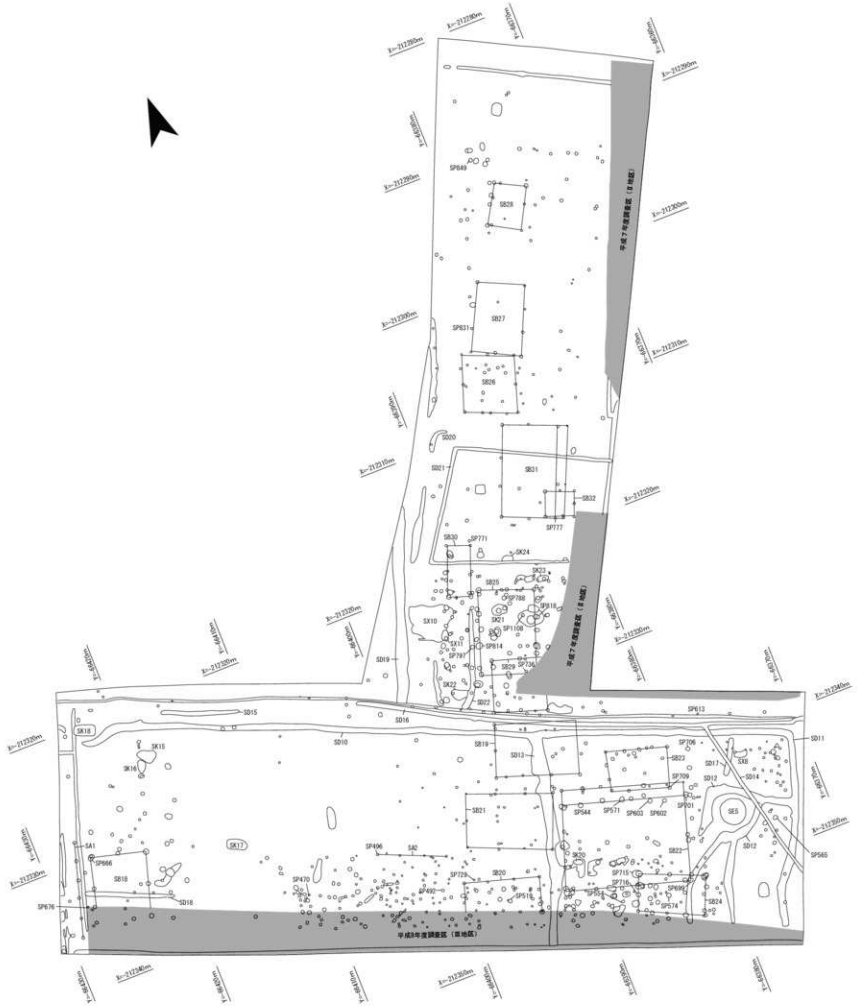
2013年３月22日

編集・発行　公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073　山口県山口市春日町３番22号

印　　刷　大村印刷株式会社
〒747-0849　山口県防府市西仁井令１－21－55







東禅寺・黒山遺跡遺構配置図

0 (1/300) 20m